

一八五七年の反乱におけるデリー政權の構造(中)

——反乱と農村社会——

長 崎 暢 子

はじめに

一八五七年五月十日、北インドの軍事基地メーラトに蜂起した東インド会社のインド人傭兵¹シパーヒーは、翌日ムガル帝国の首都デリーにおいてムガル皇帝バハードウル・シャー二世を擁立し、反乱政權を樹立した。これがいわゆる「セポイの反乱」の発端である。

当初、反乱政權の中心的荷手はいうまでもなくシパーヒーであり、これにムガル皇帝と彼の息子達およびその側近、宮廷勢力がシパーヒーに半ば強制される形で結集し、さらにそのまわりにデリーの市民達が集っていた。

既にメーラトにおいてシパーヒーが蜂起したとき、メーラト周辺の農村からはこれに呼応して数千の農民がメーラトに押しよせてきた。だが、このとき、シパーヒーには農民と共闘する用意がなく、シパーヒーは同夜、単独でデリーに進軍し、メーラトは再びイギリス軍の支配下に置かれることになった。⁽¹⁾

一八五七年の反乱におけるデリー政權の構造(中)

その後、各中小都市におけるムスリム中心の蜂起がおき、さらにもっと多くの地域の蜂起の中からデリー、ラクナウ、カーンプル、ジャーンシーなど、いくつかの大都市において反乱政権が成立した。そのため、一八五八年三月にラクナウが陥落するまで、反乱をめぐる政治の焦点は都市にあったように見える。

けれども、他方では農村におけるイギリス支配の崩壊は急速に進行し、農村各地のイギリス人施政官は農民の蜂起や不穏な行動に悩み、殆んど例外なく、その鎮圧に苦慮している。とりわけデリーをとりまく諸県の農村において、反乱に積極的な農民の存在は否定しようもなく、彼らにどのように対処するかは、反乱政府、イギリス軍の両者にとっても、きわめて重要なものとなった。

本稿は以上のような、一八五七年の反乱における農民の闘いを考察しようとするものであるが、とくに、全インドの反乱のいわば中心をなしたデリー政府の土地政策をデリー周辺の農村の闘いとの関連において検討を行うものがある。

では、このような農村の闘いは従来どのような視点から研究されてきたのであろうか。

一八五七年の反乱に関する論争の中で、本稿との関連で問題になりそうな論点は以下の三点であろう。

- (一) 一八五七年の反乱は農民戦争か否か。
- (二) 一八五七年の反乱は封建的反乱か否か。
- (三) インド村落共同体の崩壊が反乱を導いたか否か。

以上の三点は相互に関連しているが、いま便宜的に分けた上で、簡単に問題を整理しておこう。

(一) 農民反乱説

一八五七年の反乱がシバーヒールの反乱かそれとも民族的反乱かという論争が反乱勃発直後から存在することはよく知られている。即ち、この反乱は主にシバーヒールの反乱だとする説と、シバーヒール以外の諸階層も参加したとしてその役割を強調する説である。上記の農民反乱説は、論争の歴史的経過からいえば、シバーヒール以外の諸階層の参加を主張する「民族的反乱」説から生れてきたものである。

ただ、これら両説の荷い手が互いに利害を異にし、政治的立場が入り組んでいた為、論争はきわめて複雑になっている。例えばイギリスでは東インド会社の側に立つ人々は軍事反乱説を多く採用しているが、イギリス・産業資本の利益を代弁する人々は民族反乱説をとった。このような民族的反乱を招く以上、東インド会社は直ちにインド支配から手を引き、インドはイギリス国王の直轄植民地とすべきである、というわけである。また、インド独立運動の中にあっても、民族運動の方針と深刻にかかわって評価は大きくいつて二つに分れている。すなわち、イギリス統治の暴力装置たる軍隊の反乱だからこそ、独立運動として積極的に評価しよう、としたサーヴァルカルのいわば「暴力路線」が一方にある。⁽²⁾他方では、ガンディー流「非暴力」民衆運動の中に独立運動の本流を見つけようとする立場があり、これは兵士以外の反乱を評価しようとしているのである。

一八五七年の反乱に関して、「最初の独立運動」という見方を最初に打出したサーヴァルカルの功績は反乱研究史では大きい意味をもつが、インドの民族運動の中ではサーヴァルカルらとガンディーの対立が深刻であっただけ、反乱評価の対立も深刻であった。論争の細かな経緯はここでは省略するが、以上のような対立のあり方が、問題の立て方を規定したことは否定できない。即ち、現在では多くの場合、次のように問題が立てられている。民衆反乱、もしくは農民反乱は兵士の反乱をうわまわっていたかどうか。また逆に、兵士が反乱したところでしか、農民反乱はおきな

かったかどうか、言い換えれば農民反乱は兵士の反乱の結果でしかないのか。⁽³⁾ さらにはシパーヒートの反乱と農民反乱とどちらが先行したか、等々。⁽⁴⁾

要するに農民反乱もしくは民衆反乱が兵士の反乱に対置される形で検証されることに力が集中したのである。また両者の結合が問題にされるときには、逆に、「兵士の反乱と農民反乱とが統一された」という単純な主張となり、両者の結合の仕方、もしくは両者の脊離、矛盾がどのような形だったか、は殆んど検討されなかった。

このような問題状況の上に立ち、筆者は既に全体の反乱は各地の蜂起のいわば集積したものである以上、農民の蜂起とシパーヒートの蜂起の、どちらが先行したか、というような問題の設定自体が無意味であるとして、初段階の蜂起をその荷い手および行動形態によって四つのタイプに分類することを提起したのである。即ちそれは

- (1) シパーヒートによるデリー進軍型
 - (2) シパーヒートと地域との結合型
 - (3) シパーヒート以外の都市民衆蜂起型
 - (4) 農民主導型
- であった。⁽⁵⁾

また(1)において生じたシパーヒートと農民との脊離、(2)における両者の結合も既に論じてきた。⁽⁶⁾

ところで、蜂起の初段階は以上の四類型に分類できるとしても、これらの諸蜂起が再編・集中していく中で成立した主ないくつかの政権に関しては、改めて、シパーヒートと農民との関係、いいかえれば反乱政府における農民の位置が論じられなくてはならない。

とりわけ、デリー政府の場合には、シパーヒーと彼らが蜂起した地域とが結合せず、一度は地域政權の可能性を切り捨てたところに成立している一種の「中央政府」である以上（一八五七年の反乱におけるデリー政權の構造（上）参照）、ここでの両者の関係は一層重要な意味を持つであろう。本稿は、農民反乱説と兵士反乱説とが互いに否定的に評価し合い、あるいはまた対置的にとり扱われている問題状況を解決する試みとしてデリー政府と農民、ひいては農村社会との関係を論じたい。

次に、農民反乱説のもう一つの側面をデリー政府の場合には問題にしなくてはならない。

第二次大戦の独立の農民運動の昂揚と土地改革への要求の中で、この反乱に対しても新たな評価が生れた。それがこの反乱を「地主制廃止」土地を実際の耕作者へ」とする農民反乱だとみる見方である。いうまでもなく、これはタルミーズ・ハルドゥーンによって主張されたものである。彼はデリーの反乱政府、とくにシパーヒーを中心とする行政会議が「ザミーンダリー制を廃止し、所有権を実際の耕作者へ与える諸命令を出した」とした。そして日本では鈴木正四氏が、これを「最大の成果」だと高く評価している。

しかし、筆者の見るかぎり、デリー反乱政府の方針が上記のような内容をもっていたとは考えられない。デリー反乱政府に関するかぎり、「土地を実際の耕作者へ」地主制廃止」政策の存在を証明するのは無理であることも明らかにしておかなくてはならない。従って、従来日本で流布している説にも再検討を試みることになる。デリー以外の地域について述べることはここでは控えたい。

（二）封建的反乱説

インドの研究者では、(一)のように地主制廃止」反封建反乱を考える人々はむしろ少なく、主流的見解は封建的反乱

とする把え方である。その際、封建的反乱として把える論理は、一つにはこの反乱がムガル皇帝バハードウル・シャ
ー二世や、マラータの宰相の後裔ナーナー・サーヒブの反乱に代表されるように、旧来の秩序の復活を目指していた、
とする⁽⁹⁾。だが筆者は既に、ムガル皇帝の擁立過程において、ムガル皇帝のシンボル化、皇帝権力行使の制限がシパー
ヒーの手によって計られていたことを論じ、ムガル皇帝が反乱の頂点に位したことをもってそのまま旧来の秩序の復
活を目指したとはいえず、反乱の封建的性格に結びつけることの困難さを論じた。

封建的反乱説のもう一つの論拠は、本稿とかかわりのあるところだが、農村における闘争の指導層が大タールクダ
ール、ザミーンダールのような伝統的指導者^{トラディショナル・リーダー}だったという主張にある。⁽¹⁰⁾この説はこれまで、反乱した人々の名を次々
と並列的に挙げていくことによって上記の主張の証明に代えてきた。しかも、例えば、アワドの大タールクダール層
の闘いは農村の最下層民までも含んだ闘いとして高く評価されてきた。

確かに反乱初期のタールクダール達はイギリスに対する脅威としてみれば、その通り、大きな意味をもっている。
しかしながら、反乱の末期になるとイギリスの政治折衝が最も大きく効を奏し、反乱收拾策が円滑に運ばれたのもタ
ールクダール達に対してである。

また、デリー周辺のいわゆる共同保有村落^{ジョイント・ヴァレッジ}が多い地域では、後述するように、有力な大ザミーンダールがいない地
域の方がむしろ反乱しているのではないかとの疑問も提出されている。⁽¹¹⁾

要するに、封建的反乱説は地域的な土地制度の違い、反乱者の行動の表裏や反乱者相互の関係を殆んど把ええな
かった。基本的には反乱者の出身階層から反乱の性格を一気に規定してしまうものであった。

本稿ではこのような点に光をあて、少くともデリー周辺における各階層の行動の差異と連関を考究したい。封建的

反乱云々に関してはこれが封建的か反封建的かを定義的に述べることはあまり意味がないと考えており、むしろ伝統的な階層によって荷われた闘争であったとしても、その中にどのような反伝統的な芽が展開していたか、を具体的に把握するべく努力するものである。

(三) 村落共同体の崩壊

反乱と村落共同体に関しては鈴木正四氏の有名なシェーマがある。⁽¹²⁾即ち、イギリスが長期に支配した地域程、村落共同体の崩壊が進行したこと、および村落共同体の崩壊したか、あるいは崩れかかっていた地域と反乱のおこった地域とは一致する、というものである。この問題提起の日本における意味は大きかったが、それにも拘わらず、このシェーマは事実と必ずしも一致しない。この説について、後述のように若干の異論を述べることにする。

(1) これについて筆者は既に述べたことがある。長崎暢子「一八五七年の反乱における権力問題の一考察」、松井透、山崎利男編「インド史における土地制度と権力構造」一九六九年、東大出版会、所収。

(2) Keer, Dhananjay, Veer Savarkar, Bombay, 1966, pp. 41~45, Savarkar, V. D., *The Indian War of Independence*, 1st ed., London, 1909, 8th ed., New Delhi, 1970.

(3) Majumdar, R. C., ed., *British Paramountcy and Indian Renaissance*, part I. Bombay, 1963, p. 501.
しかし「The people's revolt was the effect, and not the cause, of the mutiny.」と云々。

(4) Chaudhuri, S. B., *Theories of the Indian Mutiny*, Calcutta, 1965 p. 42.

(5) 長崎暢子「セポイの反乱」岩波講座世界歴史21巻、一九六六年、岩波書店、所収。

(6) 長崎暢子「インドの一八五七年の反乱におけるシャーハーバード政権について」東洋文化研究所紀要第五冊、一九六六年、東京、所収。

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(中)

(7) タルミーズ・ハルドゥーンは“it (行政會議を指す——引用者) passed the orders for liquidating the zamindari system and giving proprietary right to the actual tiller.”と記している。この根拠となる史料の原文をタルミーズ・ハルドゥーンは引用していない為、よく分らない点があるが、もし、この根拠が、この論文の別の箇所の引用文献とされている次の文章にあるとしたら、これは上記のザミンダリー制廃止の命令とは必ずしも言えない。“If on inspection of the documents, and on the testimony of their witness, viz., the Kanungo (Registrar of Landed Rights), the patwari (Village Accountant), and other respectable men of the place, it shall be clearly proved that the claimant had really been the land-holder, ... the settlement will be made in his favour.”これは本稿の史料43と同じものと考えられるが、この文章自体は、“書類を監査し、および、カーヌンゴ(土地権益の登記人)、パトワリー(村書記)、や在地の重んじられている人々の証言によって、もし申請人が以前に真の土地保有者だったことが明らかに証明されたなら、……申請人にとりきめがなされる”という内容である。ザミンダリー制廃止には必ずしも結びつかない。Joshi, P.C.; *Rebellion 1857*, a symposium, New Delhi, 1957, p.67.

(8) 鈴木正四「フシム民族革命の研究」一九七二年、青木書店 p.123.

(9) Sen, S.N., *Eighteen Fifty Seven*, Delhi, 1957, p.411.

(10) चाटनाニョड़ा “Thus both in the pre-mutiny and mutiny periods it was the class of the landed chiefs who led the struggle against the British. The feudal framework of these movements indeed cannot be doubted though they were not of the reactionary type directed mainly for the preservation of the rights and privileges of an obsolete aristocracy...”
 चौधरी. Chaudhri, S.B., *Civil Rebellion in the Indian Mutinies*, Calcutta, 1957, p.XVII.

(11) Stokes, Eric, *Traditional Elites in the Great Rebellion of 1857: Some Aspects of Rural Revolt in the Upper and Central Doab*, Leach, Ed. and Mukherjee, S.N. ed, *Elites in South Asia*, cambridge, 1970, p.24.

(12) また小谷汪之、「アジア近現代における民族と民主主義」歴史学研究別冊、一九七二、も参照。

第一章 農村の反乱とデリー政府

第一節 デリー周辺の農村の反乱⁽¹⁾

本章の課題は、デリー周辺農村の闘いをできるだけ構造的に把握すること、および、農村の闘いとデリー政府とのかわりをデリー政府関係史料にあらわれるかぎりにおいて検討することである。従って第一節では、まず前半部分、即ちデリー周辺の農村の闘いを概観する。

だが、反乱の記述に直接入る前に、反乱前のこの地方の状態を紹介しておきたい。これによって、反乱前の農村がいかに不安定な動揺の中にあったか、が判明するからである。この史料はイギリス人の行政官により一八五二年に書かれたものである。

(1) 反乱前の農村の状態⁽²⁾

多くの村では、現在上級所有者の下で単なる耕作者になり下っている者は、かつては彼ら自身土地所有者であった

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(中)

り、あるいは前土地所有者の子孫だったりした者である。彼らの祖先や、彼ら自身が地租を払えず、容赦ない売却法^{セーグ・コ}によって、土地権益^{プロプライエタリイ・インタレスト}は由緒ある血統正しい家柄の人々から金持の手へと移った。今はありがたいことに数百人もが一挙に相続してきた権益を譲渡するような、そんな悪しき時代は終ってしまったが、その痕跡がまるで蛇の這った跡のように毒液や災悪を含んで残っている。

ブラーマンやラージプートのような高潔な人々が大集団をなして住んでおり、しかも彼らの土地権益は地租未払いの為売却されてしまっている、——このような村は我が行政上、悪疫流行地のようなものである。このような村は近隣の地租、警察関係の役人にとっては常に荆棘である。土地を失った（ラージプートやブラーマンの）クランは、土地権益購買者をたえず困らせ、脅しや暴力によって彼らと積極的・消極的に敵対し、以下の諸条件を呑ませること、即ち昔通りの土地所有者の地位に実質的に留まること、を購買者に認めさせようとする。これが彼らの最大の目的である。もし、この目的が達成されれば、万事めでたしであるが、達成されぬ間は絶えず、紛争が生ずる。間近なところにある警察や治安判事の裁判所には騷擾事件、襲撃事件、放火などの訴えが直ちに殺倒する。当局側の人間は治安判事から村番まで、誰もが前土地所有者に反対の態度を表明しているが、前土地所有者達は数も多く、近隣の人々の同情も集めていた……。

最終的帰結は、土地購売者が絶望して掘出物を諦めるか、それとも所有権者集団^{プロプライエタリイ・グループ}の権益の一部を名実ともに買収し、てしまうかのどちらかで結着がつくが、後者の場合は、反対する（前土地所有者の）長は殆んど投獄され、その子孫一族は愚かな貧しい農民に次第に沈んでいくのである。

かつて“土地所有者”として、慣習的権利を認められてきた人々は、イギリスのセトルメントおよび高額地租によって、負債を背負い土地を売却せざるを得なくなつて、今や法的には上級土地所有者の下での小作人的耕作者になり下つている。これを法的に画定するものはイギリスの導入した裁判制度である。けれども、実質的にも小作人になり下るかどうか、というところに、北西州の秩序を混乱させている最大の要因がある――。

以上がこの史料の筆者、レイクスの認識である。“前土地所有者”は近隣の人々の同情を集めており、数も多い。警察や裁判所などの権力機構を始めとして、新たに土地を購入して侵入してくる外部者の上級所有者に抵抗しつづける。この騷擾状態は、反対する“前土地所有者”の長を投獄するか、土地購買者が掘出物を諦めるか、どちらかによつてしか、結着がつかない。ここで、一八五七年の反乱において各地で蜂起した人々が必らず牢獄を襲撃して囚人を釈放した例を想起して欲しい。それはこのような脉絡の中で理解されなくてはならないのである。

ともかく、この当時、法的処理はたとえ済んでいても、彼らが下級の耕作者になり下るか、それとも事実上“土地所有者”としての昔の地位を確保しつづけるかは、彼らの不断の闘争にかかっていた。逆にこのような不安定な農村において上級土地所有者―小作人的耕作者の関係を維持していくのは、イギリスの権力であった。これが反乱前夜の農村であつた。

さてシパーヒーの反乱によって、基地に集結していたイギリス権力が崩壊を見せたとき、村落も殆んど同時に蜂起する。

以下、農民蜂起の進行を示す史料である。

(2) デリー反乱勃発の報せはこの時までに四方に広まった。周辺の道路はもはや安全でなく、通行を試みると待伏せて襲撃された。通信線も途絶えた。村落が村落を襲撃した。……あらゆる種類の武器が大量に用意された。レワリ、ファルクナガル、バハードゥルガルの三地帯で十一日間に一万四千の戦斧と八千の火縄銃――。

ジャールギールを没収されて破産した者、(イギリスの)裁判所の判決によって貧窮化した者、金貸しによって土地を追立てられた者は心を合せて騒動に参加した。その為数千人が死んだ……さらに金貸しの集積した富に対する掠奪行為は、一度火がつくと燎原の火のように広がった。⁽³⁾

以上は後に反乱下のデリー市で市警察署長となったムバーラク・シャーが都市から見た農村反乱の記録である。農村はデリー反乱を知ると間もなく、反乱の海となり、都市を結ぶ連絡網は途絶え、従来のイギリス的秩序が崩壊していったことが分る。

また武器、とくに火縄銃は農村で多く製造された、と後述のロバートソンの記録にあるが、これらがどの程度自家製造品かは分らない。

続いて各県の記録をみよう。

(3) マトゥラー県に関する記録⁽⁴⁾

暴動が起り、デリーの皇帝の宣言が発せられたとの報せは全県の人々に入り、直ちに農村は反乱状態に入った。反、

乱とは即ち、商人を襲うこと、ザミーンダールを排除して、昔の（保有者）に替えること、である。県内の暴動は数も増え、極悪にもなっている。マオト郡の大ザミーンダールであるクワル・ディルダール・アリ・ハーンは彼の支配下の村人に殺された。彼の親類であるウムラオ・バハードウルはノージール郡に保有地を持っていたが、五月二十三日、（村人に）家を包囲された。しかし我が軍（イギリス軍）が接近した為、村人は退却し、彼は逃走した。

……反乱の報せはおそろしい速さで広がり、全県は殆んど同時に蜂起した。我々は数村で襲撃を受け、辛くも逃げのびたことも数度あった。

……シパーヒーは税務署（通常一郡もしくは二郡ぐらいの地租徴集を担当）、の公金を奪った後建物に火を放った。そこに居たヨーロッパ人は反乱の火に気づき、直ちに現地を離れて、全員無事アーグラに逃げた。

税務署の建物が火に包まれたのを見ると、シパーヒーは公金を携えて（デリーに）行軍し去った。彼らは一隊を牢獄へ送り、囚人を釈放した。牢番は直ちに反乱に合流した。それから彼らもデリーに行軍していったのである。

……シパーヒーは税務署に隣接する二軒の家を焼いただけだったので、その他の被害はなかった。しかし、街道沿いの政府の建造物はすべて、即ち内国通関所や警察署等々は皆焼打ちされた。

……街道沿いの村落のザミーンダール達はすべて反乱に参加し、彼らを助けた。

……警察機構、徴税機構は全域で潰滅し、たとえ存在が見逃されていても、形式的に存在しているというに過ぎなかった。最近やってきたよそ者の所有者は排除され、殺され、デリーの皇帝の支配が宣言された。

……僅か数マイルの直径の地域の中で、五人も、六人ものザミーンダールが王を称し、デリーの皇帝の支配を宣言した。

……セート家（マトウラー市在住）はあらゆる点でよく本官を援助した。実際、彼らやその他裕福な住民の援助なくしては、本官はここに留まりえなかった。

本官は以下の提案を行つた。即ち、大ザミーンダールに広範な権限を与えること、及び可能な所では彼らを税務署長に任命することによって、秩序を掌握すること、を。この計画は承認され、実行され、よい結果を生んでいる……

以上の史料から、イギリス人行政官に見えた限りでのマトウラー県の反乱の特徴は以下のように要約できる。

(1) マトウラー県がデリーに隣接した県である以上、デリーの反乱の報せが伝わるのは速かつたろうが、報せが入ると直ちに農村は反乱に呼応して立上つた。

(2) 反乱者は「よそ者でない」土地保有者であり、数マイル四方に五人も六人もいるような中、小の村落ザミーンダールである。大ザミーンダールは反乱の側には居らず、むしろ襲撃の対象であつた。

(3) 最も打撃を受けているのはイギリスの作つた徴税機構であり、警察機構である。これらの機能を果す政府造建物物はシバーヒー、もしくは農民によつて焼打ちされ、例え存在しても、形式的存在にし過ぎなくなつてゐる。

(4) 次いで襲撃されているのが、商人及びイギリス導入の土地制度に乗つて新たにやつてきた「よそ者の土地保有者」が、さらに大ザミーンダールである。

(5) これに丁度呼応するようにマトウラー市在住の裕福なセート家はイギリスを積極的に援助している。

(6) イギリスの側では、大ザミーンダールを税務署長に任命し、彼らを徴税機構の中に組み入れることにより、イギリスの秩序の回復を計つてゐた。

(4) サハランブル県に関する副治安判事ロバートソンの記録⁽⁵⁾

五月二十三日より数日前、我々はサハランブル市周辺の大きい村が数村、一緒になって我々を襲撃しようとしていること、を確認した。我々は運よく得た報せに接し、反乱者が自らチャンスを選んで攻撃してくるのを待つ愚はするまい、と決意したが、攻撃に出るには我々は弱体すぎた。……

……我々が接近すると、普通、(反乱)村民は退却して、一発も銃声が鳴りひびかない内に散ってしまふ。

(五月二十七日)……デীবオバンドに到着すると、周辺で起った数件の暴力事件の犯人を見つけようとして、本官は調査を開始した。その結果有罪なのは村全体であり、個人ではないこと、が判明した。例をあげると、バンジャープの年金受領者簿に名が載ったばかりのインド人将校^{リヴァーダール}が数人の仲間やその家族と一諸に故郷へ旅行中だった。……三村が合同して彼らを攻撃した。……本官は直ちに罪を犯した諸村のザミーンダール達に通達を發し、直ちに回頭して告發された嫌疑をはらすよう命じた。しかしながら、間もなく予想通りの回答が到着した。それは即ち、ザミーンダール達には回頭する意志は全くない。かえって我々に対抗する為、彼らと同じクランの者を集結させようとして、八方に騎者を派遣したという事実だった。約六週間前、このシーズンの始めの頃、地租^{レウエヌー・セトルメント}のとりきめを行うときに、上記の村々は本官の巡回した諸村だった。その時には富める者も貧しい者も、全員が土地に関心をほらっており、本官が彼らの土地を単独で武装もせずに廻っていたのを囲んで熱心に議論をした。……軍は反乱するかもしれないが、平和な村民がこのように急激に変化するとは本官は殆んど信じられない。……(イギリス側が勝利した戦闘によって一件落着後)……

…この事件は、ザミーン、ダー達、下層の人々と、一体であること、掠奪だけでなく、反乱自体が大衆を動かしているのだということ、を明瞭に本官に示した。

(6) ……彼ら（第二九歩兵連隊の一中隊——サハランブル駐屯のシバーヒー）は当分の間、反乱軍と戦うことに定めた。しかしながら、農村——おそらくは彼らの出身村——の聲は彼らの行為が政治的なカーストの行為や軍隊の意志に反するとして徹頭徹尾嘲った。……カーストの主綱は結合であり、それがカースト維持の秘密である。北西州ではカーストが唯一の宗教である。……

……彼（ウスマーン・ハーン）は蜂起が始った時から、絶えず本官を訪問した。本官がサハランブルの基地にいる時も、（ウスマーン・ハーンの居住地の）ベラスプルから訪問可能範囲内にキャンプしている時も。しかし嵐が我々の周辺まで接近してくると、彼は本官を訪問するのに態度は変えないが、パンジャラー・コミュニティの長であるディーダル・シングとつれ立ってくることが分った。ディーダル・シングは彼のクラン（パンジャラー）の中では多くの点で力を持っているが、単純なパンジャラー、即ち牛飼いに過ぎず、ウスマーン・ハーンに太刀打ち出来る人物ではなかった。ムハメダンとパンジャラーはその性質上、不倶戴天の敵である。だから狡猾な老ムハメダン（ウスマーン・ハーン）が個人的感情はいざ知らず、深い陰謀をめぐらしているのだと容易に感知できた。ウスマーン・ハーンはパンジャラーという強力なクランの協力を得ようと望んでいたものであり、ディーダル・シングは明らかにその術中に陥っていたのである。この二人の男が協力すれば、必要とあれば、サハランブル北部の全住民を支配できたであらう。サハランブル県北部の人口は数は多くないが、強壯でよく武装されており、狩猟などを通じて武器の使用に熟達していた。

……デリーが陥落し、勝敗の行方が疑いなく判明すると、ウスマーン・ハーンとディーダル・シングが一緒にいるところは見られなくなった。本来の族的、あるいは信条的敵対心が頭をもたげ、ウスマーン・ハーンの方は丁寧に振舞う関心もなくなり、ディーダル・シングの方は相手に許した親密さを恥じているように見えた。

……(ノールルの) ⁽⁷⁾ 税務署と警察署はかなり高台にあり、市の郊外だった。本官は公式書類が安全かどうか確認しにこの地へ直行した。しかし、この種の建物としては美しかった建物は共に焰に包まれ、救いようがなく、間もなく灰燼に帰した。

……全農村が我々を攻撃すべく蜂起した。遠くから聞こえるたんたん、というひびきや太鼓の音はもはや違う方もなかった。これらのひびきは彼らが味方を鼓舞し、攻撃のときに用いるもので、現在の我々には先刻馴染のものであったが、あらゆる方面から聞こえてくるのだった。

(8) ……いくつかの戦闘を通じて、本官は反乱者達が相対的な意味でいかによい武器で装備されているかを観察した。しかし、捕獲した火縄銃は殆んど最近製造されたものだという事実からみると、武器の持主が非常によくない射撃手であることが分る。と同時にインド人が、普通の村民さえも、いかに早く武器の製造法を習得したかをも示している。

……昼夜を分たぬ行軍中に行なった調査によると、この地方では、ハメダンが終始一貫反乱の煽動者であった。彼らがまず一団となって蜂起する。ヒンドゥーは大眾となつて反乱者の数を増やし蜂起を普遍的なものに広げる。無政府状態となつたり、負債記録を破棄したりしたときに得をするクラスは殆んどヒンドゥーである。

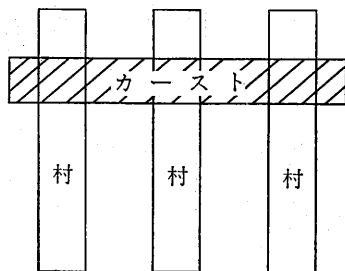
……貧しい耕作者クラスに金を貸している人々は常に比較的大きな町に住んでいる。従つて、行政権力が麻痺すると、

町は攻撃目標となった。

……小土地保有者程、我々に復讐的憎悪を以つて行動した階層はいない、と本官は考える。小土地保有者達は商人達ベニヤが我々の裁判所の手を通して土地を失わせた人々である。

以上の史料が語るところは以下の諸点に要約できよう。

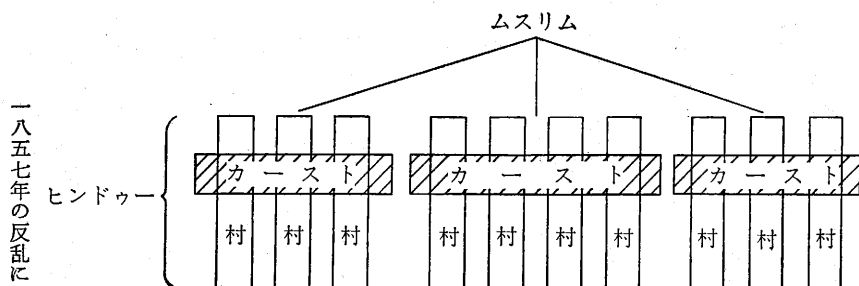
(1) 蜂起は村単位で組織されていること。村の中でも、ザミーンダールは村の下層の人々と一体であることが観察されている。だが同時に、サハランプル市のイギリス人攻撃やデオバンド市周辺の農村の抵抗は数村を単位とする。イギリス軍と事を構える事



態が明白になると、その村のザミーンダール達は、同じカースト（クラン）の人々へ集結を呼びかけ、村を越えて、檄を飛ばしている。（図1）

ここで記録者のロバートソンは村落が上級権力と対決するとき、村を越え、村同志を結びつけていく結合力としてカースト（クラン）を見た。しかも、その結合力としてのカーストは近隣の村々に馬を駆って檄を飛ばしに行くのみでなく、遠く離れた地域に駐屯する兵士にまで嘲りの声を聞かせ、動揺させ、遂には反乱にまで至らしめる力を持つ、おそるべき政治性を持っていた。

(2) カーストは村を越えた一定地域内では有効な結合力であったけれども、そのカーストの枠を越える結合力はなかったであろうか。ロバートソンは、異なるカーストでも結合しうる実例として、ムスリムのウスマーン・ハーンとバンジャラーのディーダル・シングの接近の模様を記している。それは一般に反乱に関していわれているように、



イギリス権力がいなくなると各カーストは互の利益を主張してバラバラになり、他のカーストやグループと共闘できない⁽⁹⁾——という通念と逆であった。イギリス権力を打倒しうる可能性と意志があったとき、不倶戴天の敵である各コミュニティの長も露骨に接近し、その可能性がなくなり、イギリス権力が居坐ったとき、連帯は崩壊したのである。各コミュニティはこのような政治的柔軟性を持っていたのである。

さらに、この地方における煽動者としてのムスリムを挙げていることにも注目しなくてはならない⁽¹⁰⁾。この場合はムスリムが煽動者、組織者であり、ヒンドゥーが組織される大衆となつて戦う構図が記録されている。(図2)

(3) 反乱の中核となつた階層は小土地保有者であること。これら小ザミンダールがイギリス式裁判と金貸しの手により土地を失いつつあった過程が原因として記されている。六週間程前に地租のとりきめが済んだばかりの村が反乱した例もあり、地租設定に対する抵抗であることは否定できない。

(4) 地租のとりきめ||イギリス権力に対する闘いであつたことは、マトゥラー県の場合と同じく、税務署、警察署など政府建造物が襲撃され、公式記録が焼失していることから証明できる。

(5) 金貸し、商人層も攻撃の対象であつた。その結果、反乱の村が町を包囲し、攻撃する形になっている。また村の反乱は、イギリス軍が近づくと退却してしまうか、ある

いは戦えば殆んどイギリス軍の勝利に終るといふ典型的なゲリラ戦の形をとっていた。しかも反乱は敗北を続けつゝも確実に農村に広がっていったのである。

(6) 村民が性能のよい火縄銃を製造して装備していたこと。

(5) アーグラ県に関する記録⁽¹¹⁾

アーグラ市外の状態は、一言でいえば無政府状態であった。イギリス軍がアーグラ城内に撤退して、籠城し、三日間何らの作戦も行わなかったことが、あらゆる地域で税務署^{タヘシール}や警察署^{ダーナ}を襲撃する引き金のようなになった。最初に襲撃してきたのは近隣村のグーシヤル(コミュニティ)である。彼らに、隣国ドラブルのスーバ(スーバダール?)であるデオハンス・グーシヤルの部下達が合流した。

……ラクマン・シングなる男に卒いられた近隣村民によってバー(地名)も襲撃され、警察署^{ダーナ}も襲撃された。

……古い所有者が、競売によって土地を買った所有者を排除した。

ここでも以下の点が注目できる。

(1) イギリス権力はアーグラ城内に限られ、アーグラ市外ではイギリス支配は崩壊し、税務署^{タヘシール}、警察署^{ダーナ}など政府関係の建造物は襲撃されていること。

(2) 競売で土地を購入した新たな土地所有者は旧来の“土地所有者”に排除されていること。

(6) アリーガル県の記録⁽¹²⁾

月半ばに、この郡のチ、ヨ、ハン（ラージブート）は（イギリスに）復讐しようとして、援助してくれるようジャートに呼びかけ、キル（地名）を攻撃した。そこで、彼らは、政府の建物、商人や金貸しの家々を殆んどすべて掠奪し、破壊した。

……反目。昔からのラージブートとジャートとの反目はこの県の西部では猛烈である。サイイドアーバード方面、マトゥラー県でも同様だったが、デリー陥落によって反目はやっと消失した。

この県の町々ではムハメダンとヒンドゥーとの敵対感情もきびしい。

……インディオ工場。ヨーロッパ人の所有。大工場の一つは村民に掠奪され、放火された。

……アトロウリーに住むムハメダン・ザミーンダール達およびその他の住民達の蜂起と税務署長のムハンマド・アリー殺人事件は記載するのに最悪の事件である。

政府役人に対する人々の態度。県裁判所の書類および八つの税務署中、四つの税務署の書類も破棄された。全く村民だけでこれを破壊したのはギルの（税務署）の場合である。その他の場合は反乱した兵士により秩序が破壊され、掠奪が開始されてから、人々は反乱に参加している。

……ムスリム・ザミーンダールの蜂起、およびその他のアトロウリー住民蜂起、税務署長のムハンマド・アリー殺人事件は最悪の事件だった。旧来の伝統ある有力住民は主に改宗ムスリムで乱暴な気質を持っていた。数ヶ月の反乱の

間に、彼らは支配権を手中におさめた。九月の始め、コックス氏がムハンマド・アリーを、副治安判事に委任し、ダーウード・ハーンがその副官となった。しかし、ザミーンダール達は彼の承認を拒否した。九月二十五日、ムハンマダンが公然たる反乱に立上ったとき、税務署長のムハンマド・アリーは運悪く、税務署の建物から離れた為殺された。

……有力者の間におこった目だった反乱はその他にはマンガル・シングとマフタブ・シングの反乱である。二人ともアクラバードのラージプート・ザミーンダールであり、シバーヒーがアクラバードの税務署を掠奪した後は、自分の支配下の人々が記録を破棄するのを許した。税務署長を援助するのは拒否し、公然たる反乱を行った。

アリーガル県の記述の内、注目しておくべきは以下の諸点である。

(1) イギリス攻撃の為にチョーハン・ラージプートはコミュニティの違いを越えて、ジャートに共闘を呼びかけた。

(2) 政府関係の建物、公式記録類は破棄された。インド人で地租徴集業務に従事していた税務署長も殺害された。

(3) 商人、金貸し層への襲撃も他地域と変らない。

(4) 政府関係の建造物とは別にヨーロッパ人所有のインディゴ工場も襲撃された。

(7) ムザッファルナガル県の記録⁽¹³⁾

……五月十四日、人々は民事裁判所、刑事裁判所、県徴税庁コレクトレイトの役所を焼打ちした。そこにあった諸記録を破棄したのはサイド達である、とグラント氏は断定的見解を抱いている。彼によれば、サイド達が、反乱軍や盗賊が来るなどとあらぬ噂をふりまき、(イギリス人が)アルソープーラに逃げるように仕向け、その間に公文書を燃やそうと目論んだのである。

……他地域同様、大部分の場合、商人や金貸しが(反乱の)犠牲者であり、彼らの多くはかつての強欲無比の振舞いの為に損害を受けた。……

ムザッファルナガル県の特徴としても以下の諸点は明瞭である。

- (1) 裁判所、県徴税庁コレクトレイトの建物が焼打ちされ公文書が破壊されるなど、デリー反乱の三日後に、既にイギリス権力に對する反乱が行われていること。
- (2) 組織者、煽動者としての存在ムスリムのサイド達があったこと。
- (3) 商人、高利貸層は襲撃の対象であったこと。

以上、各県の記録からその特徴を述べてきたところから判明するように、デリー周辺の農村が反乱に登場してくるのは奇妙な形をとっている。農民は最初には兵士の同盟軍としての位置を与えられていなかったことは、マトゥラー県で税務署タックスの公金を奪い、建物に火を放ったシバーヒーが農民と共闘しようとせず、公金を携えてデリーに行軍してしまったことでも分る。

しかしながら、メーラト蜂起以後、農村の闘いは兵士の反乱に呼応した。呼応の仕方は迅速で、広範であった。この背景にイギリスの導入した土地制度に伴う農村再編成過程の進行があったことは言うまでもない。

ただ、高額地租が払えずに新しい土地所有者の手へ土地所有権を法的に委譲しても、その委譲が実質的になるかどうか、“前土地所有者団”が下級の小作人の地位に落ちこむかどうか、は彼らの闘い如何であった。

事実、共同体的結合の強く残っている地域やカーストには、金貸し達は土地を購入しても攻撃を恐れて足を踏み入れることができなかった。その為、これらの間では金貸しの掌握地は少なかったのである。

こうした動揺状態に農村は置かれていた。農村が反乱にすぐ呼応したのはこの闘いの下地があった為である。例えばストークスの研究でも、商人、金貸しなどへの土地委譲が少なく、彼らが掌握していなかった地域やカーストから反乱が起っていること、また村組織との関連でいえばジャートのバイアーチャーラーのような、村落共同体組織が強固に保持されているところから反乱が起っていることが主張されている⁽¹⁴⁾。農民の団結した抵抗の為に商人や金貸しが掌握することが困難だったのだから、反乱が熾烈に起るのも理由あることであった。(ただ、この研究は商人、金貸しの掌握していない村から反乱がおこっていることから、商人、金貸しに対する反乱を否定的に見ているが、それは誤解である)。

五月十日の反乱勃発以後、五月末までのデリーはその他の主だった都市が未だ反乱しない為、孤立した闘いを続けるが、一方で迅速に呼応した農民の反乱があった為に闘いの継続が可能だったのである。五月から六月初めにかけて、デリー周辺の農村は広汎にイギリス支配を脱しつつあった。

それは、シバーヒーが同盟軍として呼びかけなかった農民が、事実上の同盟軍として反乱舞台に登場してくる過程でもあった。別の言い方をすれば、その戦闘性においては高く評価されながらも、局地的な農民一揆の地位に押しこ

められてきたインドの農民反乱が、反英・反権力闘争の環の中に自らを位置づける第一歩でもあった。

さて、このような反乱の中核が、中、小土地保有者、村落ザミーンダールであること、それも、史料(4)で指摘されているように、個人／＼が反乱に加わるのではなく、最少組織単位が村だったこと、に注目したい。アワド地方などと異なり、有力な大ザミーンダールの闘いは殆んど史料に現われて来ない。村落ザミーンダールはしかも、イギリス人の見るかぎりには村落下層の人々との一体化を保持しえていた。村落の態度決定はおそらく村落パンチャーヤトのような集会でなされたものと考えられ、“前土地所有者団”としての反乱であつた。⁽¹⁵⁾

そして、このような村落共同体の団結は決して従来言われてきたような閉鎖的、孤立的な性格でなかった。村落を横に広げていったのは同じカースト、サブ・カースト、または同じゴートラとしての一体感である。

既に見てきたように、デリー周辺の反乱はチョーハン・ラージプート、ジャート、グージャール、ランガルなどのような各カースト、あるいはサブ・カースト名で闘われた。

しかも、村落を基礎単位とし、カースト・コミュニティによって横に広がった闘いに第三の要素が加わる。それはカースト・コミュニティを越えた共同行動であつた。例えば、アリーガル県でチョーハン・ラージプートがジャートに共闘を呼びかけて闘い、あるいはサハランプル県で二人のムスリムがヒンドウーのグージャールや、ランガル・コミュニティを煽動・組織することに成功し、さらにはムスリムのウスマーン・ハーンとパンジャラーのディーダル・シングのような別々のコミュニティの有力者が接近するなど、これまで反目してきたとされているコミュニティ間で共闘が成立したのである。

この理由はどう考えたらよいだろうか。後述する“敵”の問題を先まわりして言えば、それはこの時期の農民闘争

の目標が必然的に反英にならざるを得なかったからであつた。

村落は反英闘争を闘う中では自足的な完結性を保ちえない。村落は自からが村落をこえる連帯を追求し、村落共同体の閉鎖性を解体させていかなければ、村落自体の課題——イギリス導入の土地制度に反対——を達成し、村落自体を守ることはできない。カースト的血縁的組織においてもそれは同じことを意味する。一方でカースト的、血縁的紐帯を保つ為に、それを主綱にして結合していながら、カースト的・血縁的結合原理を否定し、それを越える共通目標——反英という抽象原理を設定しなくては、カースト的組織さえ守りえないのである。こうして、村落共同体、あるいはカースト的結合体の閉鎖性を解体させていく上方へのベクトルは反乱の中にこそ存在した。

ここにコミュニティを超える、インター・コミュニティな闘いが成立したのである。

さて、ここで戦いの主体の問題は一旦置いて、戦いの目標がどのように定められていたかを少し、検討しよう。

農村における反乱の第一目標がイギリスであつたことは攻撃対象から明瞭である。これまでの研究は外部者の商人^{マヘリヤン}金貸しに対する反乱を重視してきたが、最近はストークスのように、これはイギリス人施政官達が金貸し、商人を贖罪羊^{ズバット}として自からの失政批判——高額地租への批判——を避けようとして仕組んだ報告や把え方ではなかったかという批判も出て⁽¹⁶⁾いる。この批判はともかく、反乱行為からみるかぎり、高額地租を課するイギリス権力への逆行行為が第一であり、とくにサハランブル県などの記録は既に見たとおり、金貸し、商人への襲撃が意外に少ないことは注意しておかなくてはならない。

また、反イギリス行為も、アリーガル県の民間ヨーロッパ人のインディオ工場攻撃のような例も無論あつたが、反英は反権力と殆んど結びついていたのである。一八〇三年の第二次マラータ戦争の敗北以来、この地方は基本的に東

インド会社の主権の下に編入されていた。従って、デリー周辺諸県で殆んど例外なく起った税務署、裁判所、警察署などの建造物焼打ち、公金の掠奪、公文書の焼却などを見れば明瞭なように、反英がそのまま反政府闘争であった。ここに前述したように、農民闘争が全インドに広がり得る性格を持ちえる根拠の一端があった。と同時に、地租査定関係の書類、地租未納の書類などの焼却という具体的な獲得目標を持っていた為、この闘争が、抽象的にならず、各地の農民の利害との結びつきを保ち続けることができたのである。

ところで、反乱者の第二の敵は金貸し、商人である。彼らに対する闘争の評価については既に繰返し述べた。ただ、問題は、金貸しという機能に対する告発でなく、外部者としての商人、金貸しへの襲撃あるいは中小都市在住の金貸し襲撃となったことである。

後に一九世紀後半における北インドの地主と高利貸との一体化の進行を見ると、この時点では有効であった外部者攻撃という組織原理も、果して有効たり続けたか注目しておかなくてはならない問題であろう。

第二には農村における商人攻撃は、デリー市内の商人層の動向に微妙な影響を与えたことである。デリー市内の商人層の動きは直接本稿の課題ではないが、彼らに対する政策は単に兵士⇄商人の掠奪関係あるいは反乱政府への出資金問題としてでなく、農村の動向との関係で捉えらるべきである。反乱政府にとって、農村の比重が高まっていたと考えるなら、商人に対する扱いは逆にそれだけ微妙に、困難になっていた筈である。

最後に、デリー周辺においては、注目すべきはマトウラー県のように大ザミーンダール殺害事件が起っていることである。そして彼の親類に対して村民が包囲したところ、イギリスが事実上包囲を解かせるといった形をとったこと、即ちイギリスと大ザミーンダールとの癒着が明瞭なことである。史料③のようにイギリスは大ザミーンダールを徴税

機構に取りこむことによる事態収拾を考えたが、これは一方で反乱農民による大ザミーンダール敵視政策を招きよせていった。

第二節 デリー周辺の農村とデリー政府とのかわり

第一節において、デリー周辺の農村の闘いを概観する中で、農村の闘いは村落共同体を基盤としながら、村落を越えるつながりとして、ゴートラの、カースト的結合が存在したことを指摘した。さらに、結合は同じカースト内にとどまることなく、異なるカースト間の共闘が発生しつつあったことも指摘した。このようなインター・コミユナルな結合があちこちに存在しえた理由は戦いが反英であったところにある、と筆者は述べた。

それでは、こうした反英闘争は自らの権力提起をどのようにして行ったか、ということが本節の課題である。それは村落的×カースト的結合原理をもちつつ、それを越えようとする農村の闘いが、デリー反乱政府という一つの国家権力にどのようににかかわったか、を説明することでもある。

さて、デリー周辺の農村において、シパーヒーに呼応して立上った農民は、デリーに進軍してしまったシパーヒーによって、いわば「置き去り」にされたにもかかわらず、成立したデリー反乱政府へ働きかけを開始する。その態度は、例えばデリーの商人の曖昧な態度に対して際立った対照をなす。

(8) 五月十七日、ナドホウリ村の土地保有者達は出仕して、各一ルピーずつ献上し、忠誠を誓った。皇帝は、彼らの村で妥当な措置を行って秩序を維持するように、もし、それが出来ぬなら追放する、と述べた。⁽¹⁹⁾

(9) メーラト駐在のシパーヒー、ジョワーヒル・シング、ブラジハリの土地所有者^{ランドオーナー}、ローシャン・シング、同じく土地所有者のチャンディ・ラームの共同の上奏文。日附なし。⁽²⁰⁾

世界の庇護者たる皇帝陛下

……(我々)六十村の住民達はクシャトリア・カーストに属する者達だが、陛下の為に命をなげ出す覚悟である。だが、ガンジスの他岸の住民達は陛下の僕たる私の言うことを全面的に信用しない。とはいえ、これら土地保有者達も、小部隊たりとも陛下の僕たる私の指揮下にある軍隊を見、文書に記された勅令を拝して自分の眼で確たる証を得たらば、陛下の大義の為に皆死を賭すであらましよう。

部隊の援助があることが確実になれば、メーラト県のムキムブルの土地保有者たるカイハル・シングの持つ八十四村、およびブムラヒ村のデヴィ・シングの持つ八十七村、は既に陛下の為に命をなげ出す覚悟を持っているが、軍隊と御璽のある勅令を拝したら、公然と陛下の為に戦うでありましよう。

……砲兵部隊を伴う歩兵一連隊を、陛下の僕たる私の指揮下に御与え下さい。

(鉛筆書きによる皇帝自筆の勅令——原註)

ミルザー・ムガルは直ちに歩兵部隊の將校に命令を発すること。部隊派遣の件に関してはジョワーヒル・シングの要求通り行う。

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(中)

(日附なし——原註)

(10) (八月七日) メーラト県のバローダ・ズイラの数人の土地保有者から出た請願文が受理された。そこには皇帝が彼らを援助するなら、皇帝が徴税することを承諾するに吝さかでない、と記されてあった。請願文はミルザー・ムガルに廻された。⁽²¹⁾

以上の史料および後述の史料(13、14、15、17、18、19)をみれば、デリー政府へつながりを求めてくる土地保有者達は殆んど複数で現われてくることが分る。一ルピーずつ献上金として持ち来り忠誠を誓うような「××村の土地保有者達」である以上、彼らは第一節で述べたような農村の反乱の中核となった中、小土地保有者であることが分る。

また、他方で、彼らは史料(9)でみられるように「クシャトリア・カーストに属する」として数十村単位の村の連合体をも部隊として持っている。ここに中、小土地保有者を核とした村落の闘いは村落の閉鎖性を破って拡張しただけでなく、権力への結びつきを意識的に提起していったことが明らかである。

一方、複数で史料に現われず、単独で行動する、有力なザミンダールについては以下のような記述がある。

(11) ラワルジはジャイプルの富裕で勢力ある土地保有者^{ランド・ホルダー}だったが、近年はデリーに住んでいた。彼は従者を持って居り、(バッラバガルの王と)同様に反乱軍に加われと要請された。(しかし、ジャイプルから大部隊を連れてくると称して)物々しくジャイプルへ発ち、二度と帰らなかった。⁽²²⁾

以上の行為が富裕な土地保有者の典型的なものであった。中には以下のように反乱側につく者も居たが、それは数少ない。

(12) イードの日、ガージーアードの勢力あるザミーンダールであるビシャン・シングとバグワト・シングは皇帝に表敬訪問の為および献上金^{ナズ}を捧げる為にデリーへやってきた⁽²³⁾。

デリー反乱政府は農村の大ザミーンダール達とはつながりを持ちえていない。これは第一節で述べた農村内の状況——大ザミーンダールは反乱に積極的でないこと——と一致する。従来言われて来たような旧来の大土地保有者＝農村支配層が反乱を荷った、という事実は少くともデリー周辺とデリー政府に関する限り存在しない。ただ、反乱政府としては、反乱に参加しないからといって大ザミーンダールを追及したりすることは殆んどなかった。農村では史料(3)においてみられたように、大ザミーンダール殺害事件も起っているがデリー市内ではこのような大ザミーンダール敵視政策はみられない。建前としては大ザミーンダールにも反乱を呼びかけ、具体的行為としては彼らを放置したに止まった。

次に、デリー政府につながりを求めてくる農民の動機、目的を考えてみよう。

(13) バードシャーブルのザミーンダール^{タハシールダール}達は税務署長になろうと志願した。ズイラダール（この場合はバードシャーブルの徴税官、すなわち県知事を意味する）は税務署長^{タハシールダール}任命をとりきめるよう命ぜられた⁽²⁴⁾。

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造（中）

(14) この県(ビジュヌール)のザミーンダール達からの一通の上奏文が受理された。彼らは皇帝が統治を行うようにと嘆願していた。それに対する回答として、部隊がこの県へ進軍し次第、統治を行う旨、通知を行った。上奏文は反乱勃発三ヶ月後(八月十日頃)に受理されたものである。⁽²⁵⁾

(15) (八月十七日)ナレリの数人の土地保有者がやってきてこう訴えた。彼らはイギリス人を三人殺してしまった。その為彼らの村は破壊されてしまうであろう。彼らは皇帝の庇護を求めた。しかし、皇帝はいかなる援助をすることをも拒絶した。⁽²⁶⁾

(16) マトゥラーの近くのガリーのジャーギーダールであるドゥンディ・ハーンの弟が甥を通じて上奏文を送ってきた。その中で彼はイギリス政府に没収されたジャーギール地を返還してくれ、と請願していた。バフト・ハーンはこれを支持した。これは反乱勃発より三ヶ月前後に起った。⁽²⁷⁾

(17) グルガーオン地域のザミーンダール達は上奏文を提出した。彼らは皇帝にこの県の無秩序な状態について注意を喚起し、役人を派遣し、統治を行うよう嘆願した。この上奏文に基づき、アルワルから来たマウルヴィー・ファズレ・ハクは自分の甥を任命するよう提案した。甥(名は忘れた——原註)はかつてイギリス政府の下でこの県に於いて雇われていた人物である。その結果、甥はズイラダール、即ち県の地租徴集責任者とされた。しかし、実際にこの甥がグルガーオンへ出発したかどうかは(ハキーム・アフサヌッラー・ハーンは)知らない。この任命はデリー陥落の僅か

十五日か二十日前であった。ファズレ・ハクはズイラダールの下の税務署長も数人任命した。⁽²⁹⁾

デリー周辺の農村では、旧来の土地保有者がイギリス統治以降新たに侵入した投機的な土地保有者を反乱とともに襲撃し、追出すケースが見られることは既に第一節で述べた。彼らはその場合、追出しをデリー政府に要請して、その結果を待ったのではない。自からの手で奪還したのである。追出しを要請している史料は管見の限り存在しない。その意味では史料⑩の「没収されたジャーギール地の返還」要請は例外的である。

土地保有者が求めたものは、まず第一に自からの奪還行為も含め、イギリスの地租徴集機構襲撃も含めて、自からの存在および行為の公的正当性の承認である。

史料(8)において農民達は一ルピーずつ献上して忠誠を誓い、その代りに「彼らの村で秩序を維持せよ」との保障を得た。史料(9)においては農民達は「小部隊たりとも」皇帝から派遣された軍隊と文書化された勅令を、いいかえれば「皇帝陛下の大義」を必要とした。史料⑩に見られるように、土地保有者は確かに皇帝の「援助」を求めたが、それは史料⑪にみられるとおり、例えばイギリス人を殺害してしまった、というような、イギリスに対する実質的な打撃を意味したときにそれを「庇護」してくれるような実質的援助ではなかった。つまり、行為のイニシアティブはあくまで土地保有者達にあり、反乱政府（もしくは皇帝）はそれを観念的に「大義」で蔽ったのである。

具体的な形で土地保有者達の行為の正当性が最も保障されたのは、土地保有者が地租徴集機構の役人、税務署長に任命されたときである。史料⑬における税務署長任命は土地保有者が政府秩序内へ再編されようとする意志を明瞭に示した事例であった。

しかしながら史料⑬のような事例はむしろ少なかったように見える。とくに反乱初期には、反乱政府は史料⑭にみられるように、デリー在住の宮廷政治家、もしくはインテリ層の手によって、宮廷周辺の官吏、あるいは旧来のイギリス徴税機構の役人をそのまま、新政府の徴税機構に充用したのであった。史料⑭におけるファズレ・ハクの甥がイギリス時代の役人であったにも拘わらず、県知事、に任命された事例は、第一節におけるイギリス時代の税務署長を農民が殺害した事件と比して検討するとき、いかに農民の要求と矛盾したものであったか、が理解できよう。

ただ、それにしても、バードシャーブルのザミンダールが新政府の徴税役人になることを志願してその要望通りに登用されたことは、反乱政府における農民の地位の重要性が増大していったことを示す事態である。この事態は以下のようなデリー攻防戦における積極的な農民の働き、およびシパーヒーと農民との共同行動を通じて一層進展していったのである。

⑭ (八月十七日) ダルナの土地所有者^{ラシド・オナリス}達はイギリス軍の陣地への途中の道で、砲丸を一杯積んだ荷車が壊れているを見つけ、それを(反乱軍の側へ)運んできた。⁽³⁰⁾

⑮ (八月二十七日) ニーマチ軍のツリー・ピングなる人物は、イギリス軍が二門の大砲を奪ったとき、数人の土地保有者^{ラシド・オナリス}の協力を得て奪還した、と語った。⁽³¹⁾

以上の諸史料は、内部の闘いにおいても積極的であった農村がデリー政府と共闘していく上でも積極的だったといふことを示すものであった。農村における闘いのみならず、デリーでの闘いにまで農民が登場したのである。税務署^{タキシール}

長のような末端の役人ではあっても反乱政府の役人に積極的に就任しようとしてゆく農民の姿勢および、デリーの戦闘にも登場する農民の姿は目ざましいものであったといわねばならない。このような姿勢が、やがてデリー陥落後も、反乱のゲリラ戦を支えていくことになるのである。

いずれにせよ、まず村落の中小土地保有者は反乱政府とかかわりを求めた。その意味はどのようなものであったろうか。

第一節で述べたように、反英という共通目標は村落を越え、カーストを越えさせた。同時に、イギリスに挑戦することとは、即ち政府建造物、政府文書の破壊と焼却に象徴されるように、公権力に挑戦することであった。

しかしながら、このように公権力への挑戦を果したことで、農民が彼ら自身の権力を発見して、それにかかわろうとすることは全く別次元の問題である。これは全く新しい質の問題であった。

確かに、農民達は独自で権力を形成・保持していくことは出来なかった。彼らは村落を越え、あるいはまた例えばムスリムの指導するグージャール・ランガル連合というようなインター・コミュニティな運動体を作ることには自分で成功した。しかしながら、彼らが権力を形成・保持していくにはシパーヒーおよび皇帝という一種の脱村落共同体的階層と結びつくことが必要だった。

それにしても、農民がイギリスに代る彼ら自身の権力として発見したもののデリー反乱政府とのつながりを強めてゆくとき、この闘いは新たな質の闘いへと飛躍を上げたというべきであろう。

そして、このような権力とのかかわりはまた、農村における農民の闘い自体へも、新たな問題を投げかえさずにはおかなかったのである。

では、以下、デリー政府、もしくはシパーヒーや皇帝の側から農民の闘いに見せた対応を検討したい。

(1) 本稿で扱うデリー周辺とは、いわゆるデリー・テリトリー、北西州、およびパンジャープの一部である。パンジャープは、ロレンスの統治政策の巧妙さ、シク教徒の問題などがあった、一部を除き、反乱にそれほど積極的にならなかった。

デリー・テリトリーは以下のようにして形成された地域である。

一八〇三年の第二次マラータ戦争によって、ムガル皇帝がイギリスの「庇護下」に入ったとき、マラータは、ジャムナ河西岸の領地をイギリスに割譲した。この地は「デリーの皇族の財政の為の譲渡地」と呼ばれるが、イギリスのベンガル政府の直接支配下に置かれ駐在官が総督の参事会の監督の下に行政を執行していた。その代りに皇帝は年金を受けていた。この地はデリー市とその周辺から成り、一八〇六年までは境界もあまり明瞭ではなかったが、一八一一年、チャールズ・メトカフが駐在官となった頃から、かなり区域が明確化された。以下、いわゆるデリー・テリトリーに含まれていたバルガナである。Karnal, Panipat, Gunour, Sonapat, Sonulka, Palam, Najafgarh, Pali, Paikal, Aliverdi, Tehar, Rchta, Bowana, Mandouti, Hansi, Maham, Tosham Jamalpur, Asowda,

Panigrahi, Devendra, *Charles Metcalfe in India*, New Delhi, 1968, pp. 24—25.

また、北西州は以下のような経過で形成された。一八〇一年マワドの大守から東インド会社に割譲された州 (The Ceded Provinces) と一八〇三年、ダウラト・ラーオ・シンディアの征服によって獲得した州 (The Conquered Provinces) を併せて、The Ceded and Conquered Provinces と呼ばれていたが、後に Upper Provinces とな、Western Provinces とな、North Western Provinces などと置かれた。これらは後 United Provinces of Agra and Oudh となり、現在の Uttar Pradesh の主要部分を構成している。The Ceded and Conquered Provinces の構成諸県は以下の通りである。

Ceded Provinces Conquered Provinces

Allahabad

Agra

Cawnpore	Aligarh
Gorakhpur	Northern Saharanpur
Moradabad	Sonhen
Bareilly	"
Etawah	Bundelkhand
Farrukhabad	

- (2) Raikes, Charles, *Notes on the North-Western Provinces of India*, 1852, London, pp. 130~131. Raikes の注に
 リの治安判事および徴税官だった。従つてより正確には一八五二年の北西州の農村の状態と題すべきかもしれない。
- (3) Mubarak Shah, *City of Delhi during the Siege*, unpublished manuscript, pp. 26-27.
- (4) Narrative of Events, district Muttra, from M. Thornhill to G. F. Harvey, dated 10 August 1858, quoted from
 Gupta, S. C., *Agrarian Background and the 1857 Rebellion in the North-Western Provinces*, Enquiry No. 1, pp. 86~87.
- (5) Robertson, H. Dundas, *District duties during the Revolt in the North-West Provinces of India*, in 1857; with
 Remarks on subsequent investigations during 1858—59, London, 1859, pp. 32~45. ロバートソンは一八五七年、反乱勃発
 時には北西州サハランプル県の副治安判事であり、その年の九月に同県の徴税官代行となった。一八五七年末には北西州、ア
 ワド、ベンガル、中央インド各地のこの反乱に関する調査を委任された。しかし、この書で見られるとおり、サハランプル県に
 関する証言が最も有益、詳細である。
- (6) *ibid.*, pp. 61~38.
- (7) *ibid.*, pp. 103~108.
- (8) *ibid.*, pp. 130~137.

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(中)

(9) Stokes, Eric; op. cit., p. 19.

(10) サハランブル県の政務官W・ウイリアムの記録の中に、ロバートソンの言として、マレータとスクールという二人の影響の大きいムスリムのせいだ、この地方が広範に反乱したのだという記述がある。それによると、二人のムスリムはグーシヤルに対しては、掠奪ができるとか、商人の台帳を破壊できるなどと煽動し、グーシヤルの中でもフトワ（ジャムナ河沿いの Ambatha の近く Budha Khara 付近で蜂起、グーシヤルの王と称した）のような者に対しては、この地であつてあつた勢力を再びとり戻させる、と煽動した。ランガル・ロモニニヤに対しては、宗教が同じ（イスラームだったので）援助を得るのに困難がなかった、とつづる。（この地方のランガルは、Kunda Rangar と呼ばれ、ムスリム・ラージプートである）

Stokes, Eric, *Rural Revolt in the Great Rebellion of 1857 in India: A Study of the Saharanpur and Muzaffarnagar Districts*, The Historical Journal XII, 4 (1969), p. 612.

(11) Narrative of Events, district Agra, from A. L. M. Phillips magistrate to commissioner, dated 18 November 1858, quoted from S. C. Gupta op. cit., pp. 88—89.

(12) Narrative of Events attending the outbreak of disturbances and the restoration, of authority in the districts of Aligarh in 1857—58. No. 11 of 1858 from W. J. Bromley magistrate and Collector of Aligarh to A. Cocks special commissioner, dated Aligarh the 17th Nov. 1858, quoted from S. C. Gupta, *ibid.*, pp. 83—87.

(13) Narrative of Events at Moozuffernuggar by R. M. Edwards dated 16th Nov. 1858, quoted from S. C. Gupta, *ibid.*, p. 82.

(14) Stokes, Eric; *Rural Revolt*,...op. cit., p. 610.

(15) 反乱参加の態度決定をマンチャヤトで行った事例は見ることはできないが、反乱不参加の決定を行った事例は見る事ができる。即ち、或る村において、ヨーロッパ人を匿まうことを決定する時に、「この村は共同相統団メンバーを集め、秘密会議

でヨーロッパ人を守ることが宣言した」Robertson, op. cit., p. 27. 従って共同保有村ではこのように会議を開いて反乱参加をも定めたのではないかと推測される。

(16) Stokes, Eric; op. cit., p. 618.

(17) 地租が高くなったという点について、詳細に述べるには別稿を期する他ないが、ここに断片的にいくつかの史料をあげておきたい。

第二次マラータ戦争（一八〇三年）の責任者、ロード・レイクは戦争遂行の過程で、ジャールギルダール、タールクダール、イステイムラルダールなどと呼ばれる大土地保有者の歓心を買う為、コーンウォーリスのベンガルにおけるバーマメント・セトルメントと同様の精神で彼らに土地をデリー・テリトリでも分け与えた。従って二代目駐在官シートンが一八〇六年に着任したとき、テリトリ全体が免税地もしくは部分的免税地に「分けられてしまっている」のを見出した。この結果デリーの地租行政の責任を受け継いだC・メトカフらはこの地の地租が少ないことを発見して増収を試みはじめた。

一八一九〜二〇年頃までの増収の内容はこのようなジャールギル地の回収によって生じたものであるが、一八二二年以降は地租額それ自体の増額である。農民一人当りの負担額はこの頃から急速に増加したのではないかと考えられる。

この結果、逃散がおこっている。三十年代初期の地租行政官達の報告では、この逃散が地租行政によるものではない、と言いつけるのに大童である。

また地租が高くなったということについては、一八二三〜二四年にデリー・テリトリにフレイザーが新地租率を決めたことも参考になる。

	従来のビーガー当りの地租額 (ルピー)	改定額
米	3-0-0	3-8-0

綿 (Bom Cotton) と 麻 (Suma Hemp)	3—8—0	3—15—0
イソデ ⁴ ゴ	3—8—0	3—15—0
Chahce (カンガイ)		
小麦	4—0—8	4—8—0
大麦	3—8—0	3—15—0
Byrance (非カンガイ)		
小麦	2—0—0	2—4—0
大麦	1—8—0	1—11—0
玉ねぎ	3—8—0	3—15—0
タバコ	3—8—0	3—15—0
カラシ	1—12—0	1—15—6

254 Panigrahi, Devendra, *Charles Metcalfe in India*, op. cit., pp. 26, 58, 64, 67.

(18) 長崎陽子「一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(上)」東洋文化研究所紀要第六四冊、一九七四年 pp. 208—211.

(19) 新聞編集者、チャムニー・ラールによる一八五七年五月一日から二〇日までの日記形式による記述。Garrett, H. L. O. ed., *The Trial of Muhammad Bahadur Shah*, Punjab. 1932 p. 183. (254 Trial. 参考)

(20) Trial, p. 100.

(21) Metcalfe, Charles Theophilus, translated.; *Two Native Narratives of the Mutiny in Delhi*, Indian ed. Delhi, 1974, p. 185. これは、マイヌッディーン・ハサン・ハーンとムンシー・ジール・ラールの二人の記述をメトカフが一八八五年に翻訳、出版したものである。本文に引用したのはムンシー・ジール・ラールの日記である。彼は、反乱前にはイギリス東インド会社がムガル皇帝に与える年金の会計係であり、総督代理とムガル皇帝の間を往復して一種の連絡係をもつとめていた。反乱勃発と共にデリー市内に居た彼は、反乱軍内部における種々の出来事の観察者と自ら任じ、毎日の出来事を詳細に記録した。後の時の記録をメトカフに与えたのがもたくなって本書が出版された。なお、ムンシー・ジール・ラールはイギリス勝利後名を治安判事ならびに市の政務官に任ぜられている。本書は以下「T.N.N.」と省略。

- (22) Mubarak Shah, op. cit., pp. 36-37.
- (23) *ibid.*, p. 33.
- (24) ハーワード・シャー二世裁判におけるハキーム・アフサヌッラー・ハーンの証言 Trial, p. 277.
- (25) *ibid.*, p. 278.
- (26) T. N. N., p. 198.
- (27) Trial, p. 279.
- (28) 長崎暢子「一八五七年の反乱に関するファズレ・ハクの回想録」、雑誌「東洋文化」(第五〇・五一合併号)一九六九年。
- (29) Trial, op. cit., p. 277.
- (30) T. N. N., p. 198.
- (31) *ibid.*, p. 209.

第二章 デリー政府の土地政策

第一節 中小領主に対する政策

一八五七年の反乱におけるシパーヒーと農民との最初の出会いは最初に述べたように、五月十日、メーラト蜂起の夜である。メーラト軍事基地で蜂起に成功したシパーヒーに向って、周辺の農村から数千の農民が押しよせて来た。農民達はシパーヒーと共にイギリス人を殺害し、イギリス人の住宅を襲撃した。しかし、シパーヒーは先述のマトゥラー県における時と同様（マトゥラー県の方が時期的には後だが）、立ち上った農民を置き去りにしたまま、デリーへ進軍した。最初の出会いからみるかぎり、シパーヒーに農民と共闘する用意があったとは到底考えられない。

しかしながら、デリーに進軍して、皇帝を擁立し、シパーヒーのヘゲモニーの下でデリー政府を樹立したとき、シパーヒーは改めて農村に対する政策・方針を提示しなくてはならなくなった。しかも、多くがアワド出身者であったシパーヒーとデリー周辺の農民の間には、地域政権を樹立した地方——例えばシャーハーバード——にみられるようなカースト的・血縁的紐帯は全く存在せず、むしろこれまでの関係はイギリス東インド会社という征服者の傭兵である以上、占領軍对被征服地の住民という関係であった。従来関係を覆えし得るかどうかは一つにはシパーヒーのへ

ゲモニー下の政府の打出す土地政策如何にかかっていたのである。

ところで史料からみるかぎり、デリー政権の土地政策は二つに分れている。一つはデリー周辺の地域の中で従来、太守、王などと呼ばれる有力な政治的・経済的支配者、もしくは中小領主が支配していた地域に関するものである。第二はこのような有力な政治的・経済的支配者が存在せず、デリー政府が直接支配した地域に関する土地政策である。この各々の地域に関する政策ははっきり違っており、同時に論ずることはできない。従って第一節では、中小領主の支配地域に関する土地政策——というよりは政策一般——を考察する。

② ナジーバーバードの太守、ムハンマド・ハーン宛の勅令⁽¹⁾

アブーザファル・シラージウッディーン・
ムハンマド・バハドウル・シャー
バードシャーエ・ガージー

ヒジラ暦一二五三年 統治元年⁽²⁾

……当県の全郡における掠奪、および不逞の徒による騒乱状態、およびそれを中止させる為に、歩兵を受け入れたやり方に関する詳細を含む、特別な僕の上奏文……は御高覧の榮に浴した。

……それ故、君は我が特別な恩恵を受けるであらう。以前の君の忠誠に加え、より有効に忠誠を尽すなら、皇帝の寵はいや増すであらう。

また、ナジーバーバードの全県の支配を君の手におさめんとする希望もかなえられよう。正式の証書が発行される

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(中)

まで、君はその^{デイストラクト}県の税から兵士と税吏に払い、その後は税を保管しておくように、さらにその残りをこちらに送金せよ。

……イギリス士官の逃亡後、君の手中にある資金、チャトル(?)、馬に関しては、マトゥラー・ダースおよび二人の皇帝附騎兵の手になる台帳と共に、これらを直ちに送れ。

……その結果、君を昇進させよう。

統治二十一年、ズィルカダ月二十八日(一八五七年七月二日)

この勅令は以下の3点を骨子としている。

第一には、デリー政府への帰順を要求していること。

第二には、地租問題であるが、まず、イギリス時代に徴集された地租、資金は台帳と共にデリー政府に送附することが要求されている。次にそれ以外の新たに徴集される分については、まず経常費(兵士と税吏の分)を支払うこと。

その後は一定期間プールした後、デリーへ送金すること、が要求されている模様である。いずれにせよ送金額も、送金すべき率も明確に規定されていない以上、かなり融通性のある命令だったと考えられる。

第三には、デリー政権に帰順するならば、従来の太守の^{ナワブ}支配地域の支配はそのまま容認し、支配には介入しない、従って、土地所有形態には何ら介入、改変を試みないことが殆んど明らかにされていること。同時に歩兵、騎兵を使って太守が「騒乱状態を止める為に使用した手段」も容認されていることにも注意しておかねばならない。即ち、こ

の地域には明らかに「騒乱状態」が存在したのであったが、それにも拘わらず、発足間もないデリー政府はデリー政府への帰順とひきかえに、太守の支配領域内での反乱の弾圧を容認したのであった。

次にデリー南方二十マイル程の距離にあったバッラバガルの太守との関係をみよう。

(21) 勅令、国家印つき。日附なし。

特別な僕、我が恩愛を受くべき、ラージャー・ナハル・シング・バハードウルへ⁽³⁾

知るべし。君が君自身の警察官をバハードウルブルに任命したとの事実が判明した。しかるに、既に当該地区には我が政府によりナズイルウッド・ハーンなる名の人物が任命されて居り、彼は目下アラブ・サラエに滞在中である。それ故、我が僕たる君は、君の忠誠心の命ずるところに従い、君の任命せる人物を免官すべし。

(22) バッラバガルのラージャーの上奏文⁽⁴⁾

一八五七年五月二一日

世界の庇護者たる皇帝陛下に

……皇帝陛下の命により、デリーへの幹線道路とバハードウルブルとの警察権は忠実なる請願者たる私に与えられました。しかし、皇帝陛下により、既に別の警察官が任命された以上、私は皇帝陛下の命に従い、上記警察機構の人員を免官し、皇帝陛下の任命者を以て替えました。

まず、バッラブガルのラージャーに対するデリー政府の課題は、デリー政府のいわば直接統治領域を画定することであった。バハードゥルブルはこの両者の丁度中間地点に存する。その為、デリー政府からも、ラージャーからも当該地域の支配を確保する為の警察官が派遣された。あるいは一度はこの地の警察権は皇帝の手によってラージャーに移管されたかもしれない。いずれにせよ、ラージャーはこの点に関しては完全にデリー政府に譲歩の態度を見せて居り、自分の任命した警察官は免官したのである。ここに両者の支配領域は画定された。ということはデリー政府の直接支配領域は当面バハードゥルブルまでしかなかったことになる。

それゆえ、バハードゥルブル以南の地に関しては以下に述べるように、ラージャーの支配をそのまま容認することになる。

㉓ バッラブガルの長たるナハル・シングの上奏文⁽⁵⁾

人類の王、世界の庇護者たる皇帝陛下

……皇帝陛下の御恵み深き御力により、特別な僕たる私の領地内では静穏な状態が存在しております。何故なら私は日夜、機構の整備、秩序の保全に努力致しておるからでございます。それでも一部の反抗的、騒乱の分子、バッラブガルの境界に接するバリ村の住民や、同じく境界附近のバルワル町の反乱的で無責任な分子などが反抗的となり、山賊的行為や掠奪にふけて居ります。

……しかしながら、我が慎重なる考慮からさらにまた上記の町の警察官および地租徴集官らの要望、さらに同上の土地所有権の登記人らの要望により、若干の騎兵、歩兵を彼らに与え、事態鎮静の為の手配を若干行いました。しかし

ながら、皇帝陛下の御命令なしには、必要最小限以上には介入致すことは望みません……

(24) バッラブガルのラージャーの上奏文⁽⁶⁾

一八五七年五月二十四日

……忠実なる奴隸である私は陛下の命に従うことを以って我が至福と考えて居ります。しかし、パリ村などの反抗分
子を鎮圧する手段をとるのに必要な為、止むを得ず、皇帝陛下の御前に出仕はできません。

(25) バッラブガルのラージャーの上奏文⁽⁷⁾

一八五七年五月二十七日

……私は休む間もなく、犯罪防止の手段および計画に没頭して居ります。しかし、不行跡で抵抗的なグージャル、メ
ーワト、その他のカーストは暴力行為に訴える決意を一層固め、連日、ファリーダーバードの町やバッラブガルにさ
え、不意打ちをしかけてきます。

以上の史料にみられるとうり、デリー政府がバッラブガルのラージャーの支配をそのまま容認することは即ち、ラ
ージャーの支配領域内の反乱の弾圧および、彼の樹立した警察・地租徴集の体系の容認であった。バッラブガルの大

守領内の反乱がどのようなものであったかは明瞭でないが、「バリ村の住民」とか「グーシャル、メーワト」などの断片的記事からみるかぎり、第一節で述べたような反乱を荷った人々とそれほど異ならない階層による反乱だったろう。史料⑤においてはおそらく、周辺村落からの町の襲撃という第一章第一節で述べたバターンの反乱が起ったのであろう。こうした反乱への弾圧を許すことはそのままデリー政府の農村の基盤をやがて危くするものであったに違いない。

しかしながら反乱政府はこのような弾圧容認政策または不介入方針を採らざるを得なかった。それはいわばラージャのデリー政府への忠誠心とひきかえにされたものだったからである。

だが、ラージャの忠誠心とはどのようなものであったろうか。

既に史料④においてみたように、ラージャはデリーの政府に出仕することはできない旨を表明した。この反乱においてはデリー政府もしくは皇帝の前に出仕することが「忠誠」の一つの証となっているのだが。ラージャーの「忠誠」がその為、計量されることになった。

②③ バッラプガルのラージャーの上奏文⁽⁸⁾

一八五七年五月三十日

……皇帝陛下が秩序維持の為に御使用下さるよう、二十騎の騎兵をさらに只今御送り申し上げました……

皇帝自筆の命令、鉛筆がき。

この上奏文の内容は了解した。この者は我々の味方である。

(27) 署名、印なしの命令書⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

一八五七年八月一六日

特別なる僕、善良なる意志の持主、バッラブガルのラージャー、ナハル・シングへ

……口頭による命令伝達の機会がしばしば生ずる為、我が忠実なる臣達の信頼できる代理人を(デリーに)駐在させておく必要が感じられる。従って、我が特別なる僕たる君の代理人が駐在していることは必要且つ適當である。

……全幅の信頼を持ち、代理人を送ることに一切の遲滞が生じてはならない。神の御加護により、代理人達がこの宮廷に恐怖や心配を抱くことはありえないからである。

(28) バッラブガルフのラージャーの上奏文⁽¹¹⁾

一八五七年九月一日

神の代理人たる皇帝陛下

一八五七年の反乱におけるデリー政權の構造(中)

我が上奏文に対する陛下の御回答書を拝領いたしました。それは黒褐色の馬の献上を御認め下さり、軍の抑圧行為を恐れることはいらぬ、と御指示下されたものでございます。

皇帝陛下の限りなき恩寵と恩愛を以て、願わくば、当県のパリとバルワルの地域を私に賜われますよう、そうすれば私は司法上、徴税機構上、最も完全なる制度を樹立致します……

(29) バッラプガルのラージャーの上奏文⁽¹²⁾

一八五七年九月二日

神の代理人たる皇帝陛下

上奏致します。陛下の御信書を拝領致しました。黒褐色の馬の献上を御認め下さり、さらにバッラプガルフ領内に對しては、軍は誰一人として如何なる抑圧行為も不当な圧迫も行わぬと御確証下さる陛下の御信書をいただきましたことは無上の光栄でございます。

以上の四史料は、頻繁な往復文書の中から選び出した為に文脈として分りにくくなった。だが、往復文書にあらわれるかぎりではラージャーの「忠誠心」は問題はないように見える。ラージャーは表向きは最初からデリー政府への帰順を明らかにしていた。ただ、彼は再三の宮廷出仕要求に對しては、言を左右にし、あるいは史料(29)のように政情

不穩を理由に応じなかった。代理人さえ駐在させなかったことは史料⑧以下の史料から明らかである。

ラージャーはその代りとして、騎兵二十騎、イード・ル・フィットルおよびイード・ル・ズハーの祭りに際して各々五枚と八枚の金貨を送り、さらに黒褐色の馬をも献上した。

皇帝はこれを認め、史料⑨において「この者は我々の味方である」と記した。しかも、軍がラージャーに対して圧力をかけぬことをラージャーに確言している模様である。しかしながら以下の二史料を読むとき、ラージャーが忠誠を誓い、皇帝が軍の抵抗にもかかわらず何の圧力をも加えぬよう、彼の忠誠心を認めたことの背後には別の解釈を加えなくてはならない。

⑩ パツラブガルのラージャーは同様の（上奏文——原註）を皇帝に送った。即ち、反乱軍が『直ちに反乱に加われ、さもないと結果がどうなるか一切知らぬ』と言っている、と。その通信を受けとり、ラージャーは百名の護衛を連れてデリーに向って出発した。夜明け前にデリーの近郊に着いて、到着をハキーム・アフサヌッラー・ハーンに知らせた。しかし、ハキームは経験豊かで賢明で、何よりもイギリスの味方であったから、以下のように答えた。

決して市内には来な、直ちに帰郷せよ、もし、反乱軍が攻撃すると脅したら、從臣を集め、反乱軍を無視せよ、と。ラージャーはそれを聴いて戻った。⁽¹⁴⁾

⑪ パツラブガルのラージャーからは、マウルヴィー・ムハンマド・フリーが（宮廷に）代理として派遣されてきて、ラージャーは反乱鎮圧の為に働いている、と言った。⁽¹⁵⁾

以上二史料から明らかなように、ラージャーが宮廷に出仕しなかったのは、おそらく、イギリスに内通していた皇帝の寵臣ハキーム・アフサヌッラー・ハーンらの陰謀の爲である。ラージャーが反乱軍に一定の距離を保ち、ハキームの言に従って帰郷してしまったことを承知の上で、皇帝は「我々の味方である」と記したと思われる。これが、皇帝の反乱への姿勢の一端であり、同時に、ラージャーの「忠誠」の内容であった。

反乱軍はラージャーの「忠誠」とひきかえに領域内不介入を認めた。ラージャーはその結果、バリ村、バルワルなどにおいても「反乱を鎮圧」し、史料③のように「司法上、徴税機構上、完全なる制度を樹立」することができた。徴集した地租をデリーへ送金した形跡は全くない。

つまり、反乱軍が領域内の反乱弾圧とひきかえに獲得したラージャーなる同盟軍はこのように反乱軍には何ら頼りになる存在ではなかったのである。確かに、上記のようなラージャーやハキーム・アフサヌッラー・ハーンの巧みな行動にも拘わらず、イギリスは一層これよりも上手であり、ラージャーを軍事裁判で有罪とし、一八五八年一月九日、死刑にする。しかしながら、ラージャーは前述のとおり、決して果敢な反乱行為をしたわけではなかったのである。むしろ、イギリス勝利の際の弁明を予定した行動をとるべく努力していたといつてよい。

ラージャーに対する反乱政府の態度は後期になるにつれて、やや強硬になってゆくことは否定できない。往復書簡はあまりに瑣屑な爲一切省略するが、既に引用史料によっても軍が何らかの圧力を加えていたことはよみとれるし、この後数十万ルピーの金銭問題のからむ囚人引渡し問題が起り、軍はこれを引渡せとして強硬な脅しまでかけるようになる。だが、ラージャーが長々しい言い訳の中で皇帝からの御墨付きによって軍隊の介入要求をはねのけている態度は一貫している。軍も、ラージャーに対して、強権を発動して介入してゆく態度は一切見せず、結果としてみれば、

領内不介入は貫徹されたのであった。即ち、領内における反乱の鎮圧過程を傍観したのであった。

最後にデリー西方のジャッジャルの太守^{ナワブ}に対するデリー政府の政策について述べる。ジャッジャルの太守^{ナワブ}、アブドウル・ラフーマン・ハーンもバツラバガルのラージャー同様、反乱に参加したかどでイギリスの裁判で有罪となり、一八五七年十二月二十三日絞首刑となった人物である。⁽¹⁶⁾

(32) (五月十五日) サー・ジョン・メトカフとフォード氏がジャッジャルに姿を現わしたが、太守は彼らに隠れ家を提供することをきっぱり断つたというニュースが(反乱軍に)入った。強硬な調子で書かれた書簡が以下の勅令とともに送られた。以下の勅令とは直ちに皇帝の側に参加すべし、さもないと攻撃を受けるべし、と。⁽¹⁷⁾

(33) 反乱軍は一人のシバーヒーに手紙をつけてジャッジャルの太守^{ナワブ}、アブドウル・ラフーマン・ハーンに派遣した。その内容は反乱軍に加わり、反乱の目的遂行を助けるようにとの要請であり、同時にこれを拒否した際にはジャッジャルに向けて行軍するとの警告も含まれていた。太守は形式的な援助をした。というよりむしろ、反乱軍を誤解させ、太守への攻撃を避けようとして五十騎の兵を派遣し、こう言った、これは先発隊であって、もっと大部隊の派遣を準備している、と。⁽¹⁸⁾

……ジャッジャルに対する行軍はその結果延期され、ロータクへの行軍が代りに編成された。……

(34) (五月十五日) ジャッジャルの太守^{ナワブ}の代理人、グラーム・ハーンが騎兵のアクバル・アリーに判われて到着した。
一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(中)

彼はこう述べた。ジャッジャル軍は全員反乱し、彼らを秩序に服させることにジャッジャルはかかずらわっている。また皇帝軍（反乱軍）を増援する為、五十人の騎兵が派遣された、と。⁽¹⁹⁾

(35) 反乱軍の指揮官達は皇帝に代り、以下のような第二の命令をジャッジャルの太守に送った。『出仕して、計画に参加せよ、我が軍の指揮官、且つ指導者となれ』と。太守はこれに対する回答として、百人の兵士を太守の義父の指揮下に置くように皇帝のもとに派遣してきた。太守の義父はデリーに居り、実は太守同様、イギリスの味方であった。⁽²⁰⁾

この史料に現われるかぎり、ジャッジャルの太守の行動はバッラブガルのラージャーの行動と酷似している。太守は表面上は反乱軍に服従的態度を示した。反乱軍の要求したものを一部分ずつ、形式的に果たすことによって、反乱軍のジャッジャル行軍を回避することに成功している。代理人の派遣、先発隊としての五十騎兵、デリー在住の彼の義父の指揮下に置くべき百人の兵の派遣などが彼の反乱軍への「援助」もしくは「参加」の実質であった。この間、太守は自らの支配領域内での秩序の回復に努めた。

反乱軍はこのような太守の巧みな回避策に眩惑され、あり得たかも知れないジャッジャル出動をやめ、バッラブガルに対すると同様不介入政策を事実上採用したのである。おそらくこの地域の土地政策も太守の手に完全に委ねられて居り、バッラブガル同様何ら独自の政策は実行されなかったであろうと思われる。

さて、以上考察してきたように、デリー周辺地域といっても、旧来の有力な政治的・経済的支配者の存在した地域

では、反乱は様相を異にしていたことが分る。

完全にイギリス側として旗色鮮明であった人々はともかく、イギリスによって絞首刑にされたようなバッラブガルやジャッジャルの太守すくみのような人々にあっても、反乱参加は決して従来言われてきたような積極的なものではなかった。むしろ領域内での反乱は弾圧されたのであった。

無論、弾圧されたのは、基本的にはその地の闘いが弱体であったことによるが、しかし一方ではこれらの中小領主がデリー政府に帰順し、反乱軍との連絡を持ちえていたが故に行軍を回避出来、不介入の保障を得て弾圧をも強行することができた面は無視できないであろう。デリー政府が不介入政策を採用したのはおそらく、皇帝やハキーム・アフサヌッラー・ハーンなど、イギリスに傾斜していた人々の力によるものであり、それとシパーヒーの方針を一体化することは誤りであることは言うまでもない。しかしながら、シパーヒーを中心とする行政会議が皇帝らを押えて、独自の政策を展開できなかったことも事実である。シパーヒーはおそらく、このような中小領主を戦略的に高く評価していたのであろう。シパーヒーは彼らに反乱参加をあるいは呼びかけ、あるいは脅して促している。果ては史料⁸⁰のように「指揮官、且つ指導者となれ」と呼びかけた。シパーヒーはその結果、形式的にはこのような支配層の帰順を獲ちとったのである。反乱は地域的には拡大した。しかし、その代価として与えられた不介入政策には、反乱鎮圧の黙認が含まれていた。反乱が中小領主の支配領域から鎮圧され始めてゆく。反乱の地域的发展の中に崩壊の兆が既に僅かながらひそんでいたのであった。

第二節 直接支配地域における土地政策

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(中)

(A) 五月十四日の勅令

本節は第一節と異なり、中小領主の支配が存せず、反乱政府の直接支配の及んだ地域における土地政策を検討する。この地域に対しては、中小領主の支配地域においてみられたような不介入政策をとらず、反乱政府自からの方針に基いた土地政策が試行錯誤の過程を通じて建てられていったのであった。

直接支配地域とは、デリー反乱政府が存在した五月十日から九月二十日前後までの間、時期によっても異なる。従って必ずしも明確には画定出来ないが、おおまかにいって北はバグバト、西はロータク、東はガージーアーバード附近、南はグルガーオンというのが、自からの軍事力の及びうる最少支配領域だったと思われる。無論この地域を越えた地に対して、役人派遣命令などがなされた例はあるが、名目的な任命と思われる地域は除外した。

さて、上記の地域において、デリー反乱政府は始めて、何の緩衝物もなしに農民と相対した。

ところで、反乱勃発以来、デリー政府には各階層——皇帝と皇妃とその側近、王子達、シパーヒー、上層市民——の要求や方針が交錯していたことは既に述べた。⁽²¹⁾農民に対する政策もその渦の外側には立ちえない。皇帝擁立、行政會議の設定、政府閣僚の任命にあたってはシパーヒーの力が強く、皇帝らはシパーヒーの主張に押しきられた形となったが、土地政策はどうであったのか。以下にあげる史料は各階層間に土地政策をめぐる、同様の矛盾、ヘゲモニー争いがあったことをうかがわせるに充分である。ただ、デリーのシパーヒーは各地の蜂起した農民と共同行動をとることをやめてデリーに進軍してきた人々である。当然、彼らの農民に対する政策は遅れが目立った。

(30) ある時、勅令が発せられた。皇帝はの中で、国家の一般行政に軍隊も王子達も介入することを禁じた。法は

サドルスドールとムフテイーによって守られること、軍も徴税役人も裁判に介入してはならないこと、の二点が提案された。しかし、この勅令は遂に施行されなかった。軍に支持された王子達は常に（一般行政に）介入した。皇帝自身は地租徴集の為の税務署長^{タヘンシルダール}を任命したことはなかった。しかし、バフト・ハーン（七月中旬以降、軍の最高司令官）はバルワル、ホダル、シャードラーの税務署長^{タヘンシルダール}とグルガーオンのズィラダール⁽²²⁾を任命した。けれども地租は全く徴集されなかった。⁽²³⁾

(24) 皇帝は国事や税務は自分自身で執行しようとして自分のところに留保しておいている。

シパーヒーとの間にさまざまの矛盾を持つ皇帝は徴税機構をも自から掌握、執行しようと試みた。他方、軍と王子達は一致してこれを阻止しようとした。この両者の対立は諸事情から充分推察できることである。しかるに、史料に現われるかぎり、初期の土地政策をめぐる両者の対立点が何であったのかは明確ではない。先に述べた理由から、おそらく、シパーヒーが、皇帝などの案と異なる具体的な土地政策を持たなかったからだろうと思われる。例えば、行政会議設立をめぐり、諸人事権をめぐって提起したような対案をシパーヒーは土地政策に関しては持たなかったに違いない。シパーヒーが積極的な反対案を提示しなかった以上、両者の間に存在したヘゲモニー争いは異なる二つの政策の争いという形をとらなかった。即ち具体的には性格のはっきりしない、両者が妥協したとは思われない、あるいは皇帝のヘゲモニーをシパーヒーが黙認したとは思われない、勅令が以下のように発せられることになったのである。

(88) 勅令一八五七年五月十四日、特別御璽⁽²⁵⁾つき。

特別なる僕、県南部地区副徴税官、ムハンマド・アリー・ベーク

君はこの勅令を受領次第、皇帝陛下の膝下に参上し、徴集せる地租を持ち来ることを命ず。さらに、君の司法管轄区域全体にわたって、秩序維持の為、あらゆる処置を講ぜよ。緊急命令なり。

この勅令はデリー進軍Ⅱデリー反乱政府が成立してから僅か三日にして発せられたものである。従って当然、応急的な性格を持っていたと推測される。とはいえ、この勅令がその後暫くの間の反乱政府の政策を示唆していることは充分考えられる。とすればこの勅令の問題点を検討してみることが必要であろう。この勅令の問題点は以下の如きものだったと考えられる。

(1) 命令対象たるムハンマド・アリー・ベークにデリー政府出仕を命じていること。これは当時は既に述べたように、デリー政府への帰順を表明する最良の方法の一つであった。

(2) 徴集した地租をデリー政府へ差出すよう命じていること。これは時期的に考えて、既にイギリス政府の名で徴集され、保管されていたものを提出せよとの意味であろう。各地で蜂起した反乱軍はイギリス政府の国庫を襲い、徴集済みの保管されていた地租を奪い、着服することなくデリー進軍に携えて来た。そして後述するようにこの金が反乱軍の重要な財源となったのである。従って、財源確保を課題にもつ反乱軍が同様の処置をこの地に関しても採用し

ようとしたのであろう。

(3) 命令の対象者は、おそらく従来も副徴税官だった人物であろう。イギリス時代には、各県の徴税官はイギリス人、副徴税官以下がインド人というのが、多くの場合の人員配置であった。⁽²⁶⁾従って反乱勃発後、最高責任者となったインド人に命令が発せられたことと思われる。また、反乱勃発後、徴税担当官を任命したケースはあるが、そのときは新たに徴税官任命の何らかの史料を伴っているから、新たな任命を示す何の史料も伴わないこの場合は、従来からの副徴税官の留任だったと思われる。とすれば、反乱勃発後も、デリー政府の直接支配地域においても、イギリスの確立した地租徴集機構はイギリス人徴税官のいなくなったことを除けば、さしあたり、何の変更も考えられていなかったことになる。

(4) (3)に述べたような従来からの徴税担当官に対して秩序の維持を命ずる意味は以下のように考えられる。即ち、従来の秩序の最上層に位置するイギリスは追放され、反乱政府がそれに代る。しかし、その最上層部分の交代を除けば、秩序の変革は認めない、という意味であった。この勅令は新たな流動を呼びおこしつつあった反秩序に見合ったものではなかった。農村で起りつつあった事態を全く見ていないに等しく、農民の反乱を全く評価していないのであった。⁽²⁷⁾

以上を要約すれば、イギリス時代の地租徴集機構に関しては、担当官がデリー政府に帰順を表明し、デリー政府に徴集地租を提出するなど、有効な機能を果たし続けるならばそのまま彼らに秩序の維持を任せよう、ということであった。こうした意図は、既に述べた中小領主に対して(1)帰順要求、(2)徴集額の送金要求、(3)支配一任の勅令を発した(史料⁽²⁸⁾)事実と内容がよく似ていることから推測できよう。

だが、果してこのような勅令は有効に機能しえたであろうか。答えは否である。

この勅令が機能することはありえなかった。何故なら、現在起っているのは農村秩序の崩壊＝変革なのに、この勅令は本質的に現状維持の上に立っていたからである。従来の農村における地租徴集機構は既にイギリス政府権力に見合つて一九世紀の初めから作られたものであり、⁽²⁸⁾反乱はこれを覆えしつゝあつた。イギリス政府の建造物、公文書の破棄と焼却のみならず、インド人警察署長殺害事件^{タヘンシルダール}さえが起つていたことは既に第一章において述べた通りである。反乱政府が上記のような攻撃されつゝある地租徴集機構をそのまま利用しようとしたことは反乱する農民を自からの同盟軍としてみず、被支配者として、地租徴集対象としてしこみなしていなかったことを意味する。こうした態度によつては徴税は不可能であつた。⁽²⁹⁾実際こうした手段による地租納入の事例は管見のかぎり存在しない。間もなく、デリー政府自ら、この誤りに気づかざるを得なかった。以下は、皇帝自ら地租徴集が円滑に行われていないことを認める史料である。

(29) 勅令の写し。署名、花押、御璽なし。日附⁽³⁰⁾なし。

我が息子、卓抜にして剛勇なるミルザー・ザフルッディーン、別名ミルザー・ムガルへ

知るべし。騎兵、歩兵、砲兵が始めて朕の膝下に來たとき、朕は自ら親しくかく宣した。朕には彼らを助けるべき財宝、財産はないが、もし、役に立つなら、命を賭けるに吝かでない、と……(中略)

……軍が秩序回復の為に市外へ出陣せぬ為數百人もの人命が殺戮され、数千もの財産が掠奪されている。国の民事行政に関しては、諸州のどの地域でも、皇帝軍が統治する能力がない為、地租徴集機構も警察機構も確立されていない……(後略)

皇帝が原因をどこに求めているかはともかくとして、従来の徴税機構、警察機構の維持をおそらく望んだであろう皇帝自身、それが機能しないことを認めざるを得なかった。

つまり、従来の徴税機構維持の方針は二つの点から、改変をせまられたのであった。一つは前述のとうり、その機構を通じては徴税不可能だったからである。第二には、農村に手をつけずに置くには、農村があまりに動揺しており、かつ、反乱に積極的だったからであった。

農村が反乱の海となりイギリスの地租徴集機関を襲撃する一方、デリー政府への意識的にかかわりを求めてきたことは既に述べた。

デリー政府の人々には、かつて置き去りにしてきた農村から一ルピーずつ献上金を持って出仕してくる土地保有者達(史料⑧)や、「皇帝が援助するなら、徴税を承諾するに吝さかでない」との上奏文を送る土地保有者達(史料⑩)の存在は新鮮な驚異となった筈である。デリー政府にとって、一方でイギリス時代の徴税機構が機能しえないと認識してゆく過程は、他方で反乱に積極的に登場してくる農民層を発見してゆく過程であった。

(B) バハドゥル・シャー二世の宣言

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(中)

農村を支配する対象とみなし、徴税の対象とのみみなすことの上に成立していた五月十四日の勅令や帝室財政確保の考え方が破綻したことは明らかであった。この時初めて、反乱の一翼を荷う農村、という考え方がデリー政府の中に登場してくるのである。それがバハードゥル・シャー二世の宣言である。この宣言が何時、誰によって書かれたかは明瞭ではないが、かなり、早い時期に皇帝によって発せられたとされている。ただイギリス人の手によって公然化されたのは一八五七年九月二十九日のデリー・ガゼットにのってからである。

この宣言の目ざましいのはザミーンダールに関して反乱を呼びかけた点である。

そもくこの宣言はヨーロッパ人を追放する戦を宣したものであるが、その際、

(1) ザミーンダールに関して、

(2) 商人に関して、

(3) 役人に関して、

(4) 職人に関して、

(5) パンディット、ファキールその他知識階級に関して、

という様に各階層別に、イギリスによって被った害をあげ、彼らの要求を掲げて、反乱政府による解決政策をも提示しているのである。

やや長文となるが、以下ザミーンダールに関する部分のみを引用する。

(40) イギリス政府はザミーンダリー・セトルメントにおいて、法外な税を課し、多くのザミーンダールを支払い

不能にさせ、土地を競売に附して、その榮譽の地位を失わせ、破滅に陥れた。一般のライヤットによる、また女中や奴隸のような人々による訴訟制度が確立され、それによって名譽あるザミーンダールも法廷に召喚され、逮捕され、投獄され、辱めを受けた。ザミーンダールに関する訴訟は、莫大な額の印紙その他の、不必要な民事訴訟費用がかかるなど不正な処置に満ちている。しかも、訴訟は何年も繫争続行が許されている。これらすべては訴訟当事者たるザミーンダールを貧窮化する為、計算済みのことなのだ。さらに、ザミーンダールの財産には、この他に、学校、病院、道路などの名目で毎年課税される。このような不法徴集は（ムガル）皇^{ベアトシャハ} 帝政府のもとでは存在しない。逆に税は輕微で、ザミーンダールの尊嚴と名譽は安全に守られ、ザミーンダールは彼の領地^{ザミーンダール}内では絶対的支配を享受できる。ザミーンダールの繫争はシャリーアとシャーストラに従って、費用は一切要せず、即決裁判される。

部下を率いて、（反乱）費用を負担し、現在の争い（反乱）を援助するザミーンダールは地租の半額を永久に免除される。財政的援助のみを行うザミーンダールは地租の $\frac{1}{4}$ を永代免除される。また、イギリス政府の下で不当に土地を奪われたザミーンダールは、この戦いに自ら参加するなら、領^{ザミーンダール}地は回復され、地租の $\frac{1}{4}$ は免除される。⁽³¹⁾⁽³²⁾

この史料に画かれた農村は、地租徴集対象としての農村ではない。反乱に参加してくるザミーンダールを評価し、彼らに反乱を呼びかけているのである。しかも、反乱の参加の仕方、戦闘行為、財政負担を共に行う場合と財政負担のみを行う一種のシンパサイザーとしての存在を分けるなど、きめ細かい配慮が払われている。つまり、それだけ、反乱軍の側では、現実味をもってザミーンダールの組織化を考えていたのである。

反乱軍はその為にイギリス政府の地租徴集制度を糾弾した。五月十四日の勅令から推測するかぎり、反乱政府はイ

ギリス時代の地租制度変更を目ざしてはいなかった、と筆者は既に述べた。だが今度の宣言は五月十四日の勅令から明らかに一步踏み出し、イギリス地租制度の全面的批判を開始したのである。反乱政府も農村における反英闘争に踏み切ったのであった。

では、宣言文に記された反英とは一体どのような内容を持っていたか。それは三点の糾弾だと要約できるであろう。

- (1) セトルメント、とくに高額地租
- (2) 裁判制度——莫大な印紙費用や何年もの繫争を含む——
- (3) 道路税などの附加税

ここでは、イギリスの導入した地租制度の歴史に論及することは出来ないが、以上の三点は、その後のインド史においても基本的に受け継がれてきた批判点であるといつてよい。そのかぎりでは、批判点として上記三点を宣言文に明記したことはきわめて妥当であり、ザミーンダールの支持を勝ち得たであろう。

では、これに對置すべき反乱政府の施策はどうか。その点はやや明確さを欠いている。

- (1) セトルメント、とくに高額地租批判であるが、「イギリス政府の下で不当に土地を奪われたザミーンダール」は「戦いに参加するなら、ザミーンダールは回復される」としている以上、反乱政府が土地を奪われたザミーンダールの側に立っていたことは明らかだが、どのようにしてザミーンダール回復を計るのか、あるいは回復されたザミーンダールを保障していくのかは具体的には書かれていない。

また、高額地租批判に関しては、反乱政府のもとでは、地租は輕微であると述べているが、これも税額、税率を決定する原則、根拠は一切明らかにされていない。

(2)の裁判制度に関しては、裁判費用は一切要せず即決裁判であること、またザミーンダールがその領域^{ザミーンダール}内で絶対的支配を享受できるとしたのは、イギリスの裁判制度を批判し、イギリス以前の状態への復活を宣しているとみてよいであろう。ただ史料^⑧でみたように、皇帝はシパーヒーの干渉を排除してサドルッスドゥールとムフティーによる裁判制度の確立即ち、いわば古典的なイスラーム法による支配を考えており、他方シパーヒーはヒンドゥーが多かったから、具体案は判明していないものの、これに必ずしも賛成していなかったと思われる。その為、おそらく各々の思惑から、明確な案をこの宣言においても提示できなかったに違いない。

「ザミーンダールの繋争はシャリーアとシャーストラに従って即決裁判される」というような漠然とした一般方針の提示にとどまり制度的具体案が記されなかったのはその理由からだったと思われる。ただ、史料^⑧の勅令になかったシャーストラによる裁判が特記されていることは、ヒンドゥーに対するより広い配慮が勅令よりは払われているとみるべきであろう。

(3)の附加税は廃止することを明記されており問題はない。

最後に、反乱に参加するザミーンダールに対する褒賞がある。反乱に参加したザミーンダールに関する地租の永久半額免除、および財政的援助を行ったザミーンダールに対する地租の1/4永久免除は、その他のザミーンダールに対する税率が明記されていない以上一般原則でなく、単なる褒賞と考えるべきであろう。

ところで、この宣言文によって、反乱政府は、初めて農村への呼びかけの声をあげ、農村におけるイギリス時代の土地制度の改変を試みはじめたわけだが、それは果して有効だったろうか。それに答える為にはこの宣言文の持つ二つの問題点に触れなくてはならない。

第一は既に述べたところであるが、反乱政府の宣言はイギリスの作った地租制度の批判としては有効であっても、その批判が政策実現過程の中でどの程度貫かれうるのか、があまりに漠然としていて、疑問を抱かしめることにある。例えば、地租の永久半額免除は、範圍の限定なしに反乱したザミーンダル全体に及ぼしうるのか。高額地租の軽減の方法についても同様である。つまり、イギリスの地租制度を変えするため、反乱政府は何をするのか、が記されていないのである。ここにこの宣言の第一の問題があった。

第二には、逆に、宣言文がイギリスに対抗するエネルギーを持つ階層として想定したザミーンダルは、果してそれに応えうるエネルギーを持っていたか、である。ザミーンダルといっても、ベンガル地方に多い大ザミーンダルと本稿でとりあげている北西州近辺に多くみられる中小の村落ザミーンダルとは全く性質を異にしている。ここに書かれたザミーンダルは地域的には無限定であるからベンガル地方の大ザミーンダルらを当然含んでいたと考えられる。しかも、このザミーンダルには下限が設定されている。ライーヤットから訴えられることの不当さを訴え、領域内での絶対的支配を主張するのを見るとき、こうしたザミーンダルはむしろ大ザミーンダルを想定しており、村落の中、小土地保有者（彼らもザミーンダルといわれることが多い）を意味しない、と考えるべきであろう。とするなら、反乱軍は切角、農村の人々を反乱軍の同盟軍と考えて呼びかけを開始したのであったが、この呼びかけは不成功に終わったと考えなくてはならないだろう。宣言文において反乱政府が呼びかけたのは主に大ザミーンダルであったが、農村とくにデリー周辺地域にあって第一に呼びかけられるべきだったのは村落の中、小土地保有者や大ザミーンダル支配下のライーヤットだった筈であった。

(C) 土地政策に関する、行政會議のメンバーの上奏文

さて、反乱政府内には、五月十四日の勅令にみられる農村把握とバードゥル・シャー帝の宣言にみられる農村把握という、異なる二つの把握方があった。この二つは相矛盾する把握の仕方ではあったが、そのいずれも、農村の反乱を適確にみていなかった為、反乱政府と反乱農村とを結びつけえなかったのである。

ここに、第三の農村把握が登場する。それはシパーヒーが拠点とする行政會議によって行われた上奏文にみられる農村の把握であった。

だが、ここで上奏文そのものを考察する前に、上奏文の提出される過程について若干述べておきたい。それによって、この上奏文の提出がデリー政府内の各層のどのような思惑の中から行われたのかということ、即ち上奏文提出の意味を前もって明らかにしたいと考える。

ところで、デリー政府が存続しうる為には資金が必要ないことはいうまでもない。デリー政府はその財源としたのは、以下の三つである。

- (1) イギリス政府が徴集し、各地の徴税所に保管してあった税、地租。これを各地で蜂起したシパーヒーがデリーにもたらした。
- (2) デリーの商人、金貸しからの借入金。
- (3) 反乱政府が徴集する地租。

この内、時日の経つにつれて、(1)は当然使い果された。(2)は一定程度集められ、これが商人層とのトラブルの一つとなったわけだが、いずれにせよ、限界を持っていた。しかも(3)も既に述べたように、従来の機構をそのまま利用して徴集しようとする方法で行い、失敗が明らかになっていた。といって(3)以外に資金確保の手段はない。そこに以下のやりとりが生れたのである。

(41) 勅令、皇帝の鉛筆書き花押つき⁽³³⁾

一八五七年七月八日

ミルザー・ムガルへ

……知るべし。既に君の眼に明かなごとく、我国庫に現金は僅少残存するのみである。更に近い将来、何れの地からも地租の徴集される見込はなく、必要な僅少の残金も間もなく支出され尽すであらう。……君は昼もしくは今夜、最初に到着した全連隊將校を集めるよう命ずる。目的は、經常および緊急の支出を満たす資金の募集手段を考慮、決定することである。この種の集会は兵士の言葉で行政會議と呼ばれている。君はこの件に関して緊急命令を発し、これらを考慮した結果、国庫を満たす実行の可能なる計画を、どのようなものであれ、彼らからの上奏文として具体化させ、翌日皇帝の御前に提出せよ……

この勅令の結果、行政會議メンバーの意見が上奏文として提出される。それにはまた、以下のような王子ミルザー・ムガルの上奏文が同封されていたのである。

(42) ミルザー・ムガルの上奏文⁽³⁴⁾

一八五七年七月十二日

……皇帝陛下の御命令に従い、行政會議のメンバーによる正当なる考慮の結果、ここに同封する上奏文を陛下の御前に提出致します。

この件に関して発せられる諸命令は実施される……

要するに、行政會議のメンバーの上奏文は皇帝から促される形をとり、王子ミルザー・ムガルも容認した上で提出されている。この件に関する諸命令が発せられれば、実施する用意がある、といった王子はほぼ上奏文の内容も認めていたものと考えることができよう。

つまり、土地政策に関する行政會議のメンバーの問題提起が行われる段階では、皇帝、王子と彼らとの間に公然たる不一致を見ることができない。何故なら、皇帝は自からの方策によつては、当面する財源難を解決できなかったからである。勅令は財政難の打開策を行政會議メンバーに全面的に委せたことをはっきり示している。無策の点では王子ミルザー・ムガルも同様であった。財政の逼迫はこの段階ではまだ、反乱政府内における行政會議の強化の方向に

作用していたのであった。

さて、以下が上奏文である。

(43) 上奏文⁽³⁵⁾

一八五七年七月十日

貧しき者を養える皇帝陛下

上奏致します……………持ち来られた財源は軍の必需品購入の為、殆んど使い果され、残存せる僅少な額も同じ目的の為、間もなく全額支払い尽されるでしょう……………そこで我々行政會議の將校達は財源を補給する為、実現可能な便宜方策を考案すべく、皇帝陛下に命ぜられたのであります……………

……………

第一提案、利息つき借入金を商人達に納入させるべし。この借入金は秩序確立に際して利息共々返済する。

第二提案、歩兵千五百人、騎兵五百騎、馬が牽引する砲二門を周辺農村地域へ派遣するべし。目的は警察、徴税諸

機関、郵便業務機構の確立である。その結果、皇帝陛下の支配の確立が遍く知られるであろう。更に、国家の地租として徴集された金額あるいは自発的な献納金を、この派遣軍は全額寄托される責任を有する。但し、如何なる掠奪、暴虐、抑圧行為も厳罰に処すと派遣軍全員に徹底して伝え置くべし。

第一請願、上記二提案が採用さるべきこと。

第二請願、皇帝陛下が人格の高潔さに信頼を置かれる貴人が一人、軍隊とともに派遣さるべきこと。目的は支配地域の民事行政をとり行う為である。

第三請願、皇帝陛下派遣の貴人は行政會議から予め次の通告を受けること。即ち派遣地において貧しい土地保有者もしくは副徴税官を抑圧した場合、あるいは収賄を行った場合、この行政會議の決定通り処罰されること。土地保有者の所^{プロプライエタリイライツ}有^{セトルメント}権のとりきめは以下の方法に従って行うことを得。

個々の場合に関して次のことが確認される。(とりきめを申請する)申請者の名が土地所有権の登記人の書類^{カリーメンソー}か村書記の書類^{フーリー}に登記されているかどうか。

次に、申請者が国家財政に貢献していたこと、および以前の地租査定のとおりきめが彼の名で行われていたことを示す為に、申請者の以前支払った地^{ランド・レント}租の領収書を提出することが必要である。

書類審査の結果、および土地登記人、村書記、と在地の主だった人々の証言の結果、以下の事実が明白に認められた場合、とりきめは申請者の名で行う。

即ち、申請者が以前に真に土地保有者だったこと、同時に、全村もしくは村の大部分の土地の地租に責任を負うと政府が認めた村長、もしくは主だった人々の内の一人だったこと、これである。

後に別の申請者がもし現れた場合にはその申請書も受理し、調査後に最終決定を下すべく、その旨命令を書類の上に記しておく。

しかし、まず初めには、村の地租に責任を持つ村長^{ランバルダール}には、先に決定が下された人が任命される。

第四請願、支配地域を治めるべく派遣される貴人が上記諸命令通りに一切を行わぬ場合、土地保有者が行政會議に出訴することは自由であること。然るべき審議の後、貴人の決定が覆えさるべきものと判明した際には、上記決定は無効となり、眞の保有者が正当なる權利において、それに代る。

僕たる行政會議の士官

(36)
ジールワラーム・スーバダール・メジャール・パハードウル

シエオラーム・ミスル・スーバダール・メジャール

タハニヤト・ハーン・スーバダール・メジャール

ヘトラーム・スーバダール・メジャール

ベーニラーム・スーバダール・メジャール

先程から述べてきたとおり、この上奏文は当面の財政難を解決すべきものとして、シパーヒー以外の諸階層——皇帝や王子など——も容認する中で提出されてきたものである。

シパーヒーはここに書かれた方針によって皇帝と新たな対決を作り出していくことを意図したわけではない。

しかしながら、従来の徴税機構、警察機構を保持したまま、單純に送金命令を発すれば、地租の徴集が可能であると考えられた時期は既に過ぎていた。あるいはイギリスの地租制度の批判を抽象的に述べるだけで、農村の反乱がわ

きおこり、反乱政府支持が増大していくことも既に考えられなかった。それゆえ形式的には、皇帝、王子、シパーヒーの一致して支持しうる土地政策案の提出でありながら、実質的には、皇帝中心の旧機構維持政策や地租の各種率の免除策の破綻した上に、シパーヒーの新たな主張が前面に押し出された内容となったのである。その意味ではこの政策の実施過程は当然、政治の焦点と化していくものであった。

この上奏文の内容が、これまで述べてきた五月十四日の勅令、さらにバハードゥル・シャー宣言と異なるのは以下の二点である。

第一に、これは、警察、徴税機関、郵便業務等、いわば、反乱政府支配確立の為に軍隊派遣を意図するものであり、その軍隊は、当然、シパーヒーの行政会議の指揮下にあること。および軍隊とともに派遣される民事行政官たる貴人は、具体的には王子であったが、彼も、任務がほぼ定められており、彼が土地保有者、徴税担当官達を抑圧したり、収賄を行ったりすれば、「行政会議の決定通り」処罰³⁷されること。即ち、行政会議の権限が、彼よりも上であること、これである。つまり、殆んど機能しえない警察機構と地租徴集機構を行政会議の下で再編成することを企図したのである。ただ、反乱地域における上記機構の再編の為に何故軍隊派遣が必要なのか、派遣軍の性格はどのようなものであったか当然疑問が生ずるであろう。この点は後述する。

第二には、土地保有のとりきめの方法を具体的に規定したことである。周知のように、一般にとりきめ^{モルグナト}の最重要項目の一つは誰を地租支払人としてとりきめをするのか、即ち、誰を形式上の土地所有者として定めるのか、ということであった。

とりきめの方式を成文化したこと、即ち派遣軍もしくは出先機関の恣意に任せなかったことは行政会議の土地政策

がこの段階では、かなり明確になっていたことを示している。別の言い方をすれば、行政会議はとりきめの対象者を明確化することによって反乱政府への支持層を農村の中から選びとつたのである。それはバハードゥル・シャー帝の宣言文における大ザミーンダール層の選択と同じであつたか、どうか。以下史料に即して、とりきめの相手が誰かを検討してみよう。

反乱政府がとりきめを行う申請者は以下の人物である。

- (1) 登記人^{カヌーシ}の書類もしくは村書記^{バウリ}の書類に土地保有者として登記されていること、
- (2) 必要書類として、以前支払った地租の領収証を提出し、以前にも彼の名で地租査定のとりきめが行われていたことを書類上証明しなくてはならない（しかし、これは必ずしも現在まで継続していなくてもよかったらしい）。
- (3) 書面審査を行い、且つ、登記人、村書記および在地の主だった人々の証言によって、(1)に相当する真に土地保有者であつたこと、および(2)に相当する、全村（あるいは村の大部分）の地租に責任を負う村長（あるいは地租に共同で責任を負うメンバーの一人）であつたことが証明されなくてはならない。

以上の3点をさらに整理すると以下の3点になる。

- (1) 土地保有者であること
- (2) 全村（もしくは村の大部分）の地租に責任を負う村長
- (3) (2)でないときは、全村（もしくは村の大部分）の地租に共同で責任を負うメンバーの一人

以上の3点が登記人と村書記の書類によって確認され、さらに在地の主だった人々の証言によって証明されること。

以上がとりきめの対象者であった。

反乱政府の支配地域は、土地所有制でいえば、いわゆる共同保有村落ジョイント・オウネド・ヴィレッジと呼ばれる、いわゆるインドの村落共同体論の原基的素材となった村々が存在した地域である。(3)にのべられている村の地租に共同で責任を負うメンバーとは、数人もしくはそれ以上のカーストを同じくするメンバーが、一村の地租に共同で責任を持つ、この地方特有の制度を指す。しかも彼らは村内で支配的な地位を占め、耕作こそ個人／＼が別々に保有地で行っていたが、外部からの商人の土地買取りや上部権力の圧迫に対しては、「共同体」の団結を遺憾なく発揮してきたのである。(2)にのべられた村長に関してはイギリス時代にあっても、この共同責任メンバーの一人を村長としてとりきめを行った例はあり、その場合には次第に村長とその他のメンバーとの経済的格差が開いていく例も多いが、この時期のこの地域ではまだ、村長とその他のメンバーの差はそれほど開いていなかったと考えてよいであろう。

また、とりきめに際し、書類審査のみならず、在地の主だった人々の証言を必要とした以上、土地に旧来から住みついてきた人々に有利であった。イギリスの侵入とともに農村にまで押しよせてきていた商人、高利貸は、新たになされるとりきめで地歩を得ることは困難であったと思われる。

つまり、反乱政府は、いわゆる「村落共同体」の土地共同保有メンバー、村落の中、小土地保有者の中に反乱政府の支持層を選びとったのである。

勿論、この上奏文では大ザミーンダールを排除することはしていない。大ザミーンダールととりきめをすることは上記の原則から全く不可能ではない。しかし、彼らを主眼にしないことは明らかである。

反乱が勃発したとき、イギリス側は当初大ザミーンダールを警戒した。反乱政府も農村に反乱を呼びかけるときに

はバハードゥル・シャー帝の宣言にみられるように、かつて、「領域内^{ザミーンダール}で絶対的支配を享受でき」たような大ザミーンダール、中小の領主層に期待をもったこともあった。

この期待を反乱政府は全く棄てたわけではない。けれども、五月以来の戦闘の中で、大ザミーンダールが反乱に積極的でないのはシパーヒーの眼にも明瞭であった。

反面、農村の中小土地保有者の村落を結合単位とする反乱、および彼らの反乱政府への働きかけは目ざましいものであった。行政會議が反乱の同盟者としての視線をこのような階層に向けていったのは必然的だったといえよう。

最後に、(1)、(2)、(3)を備えた人物が当時の農村における「実際の耕作者」「土地なき無権利の農業労働者」でなかったことも、述べておかななくてはならない。従ってこれを以って、デリー政府が「ザミーンダリー廃止の諸命令を出した」として独立後の土地改革とみまがうような政策をとったと考えることも出来ないと思われる。

第三節 土地政策の具体的進行過程における問題——軍隊派遣について——

以上のような反乱政府の政策的変化は、実はどれだけ現実とのかかわりを持ったものだったか。

既に述べたように、従来の地租徴集権機構を利用した徴税は殆んど行われなかった。地租永久半額免除などのような特典を含んだザミーンダールへの反乱呼びかけにも、反応があった様子は史料からはうかがえない。

しかし、行政會議の上奏文に記されたやり方は、上記二方法に比べてやや現実性を持っていた、と史料的には考えることができる。上奏文提出の過程からみても、財政危機によって何らかの方策を実施する必要性に迫られており、その意味では何らかの理想をもって行われたというより、むしろ現実的な方策なのであった。

例えば、以下デリー政府の直接支配地域、ロータクにおける勅語を見よう。

(44) 勅語⁽³⁸⁾、御璽、花押なし。(おそらく公用コピーと思われる——原註)、一八五七年七月二十三日付

ロータク市の全住民へ

……宣言する。互いに暴力手段に訴えてはならぬ。(反乱)政府支持者と判明している主だった土地保有者達の權威に、住民は全面的に従わねばならぬ。必要な処置を行う為の軍隊あるいは行政組織、は直ちに派遣し確立する。合法的權威に対し、反逆行為あるいは騷擾行為にふける者は嚴罰に処す……この宣言は広く人々に知らせる為に発せられる。

デリーから二十五マイル程北西にあるロータク⁽³⁹⁾は、デリー政府からミルザー・アブー・バクル指揮下の討伐軍が派遣され、かつロータク駐在のインド兵も反乱軍を支持した為に、デリー政府の直接支配下に入った地域である。この地域での七月二十三日付の勅語は、上記上奏文の提出の十三日後に発せられたことから考えてもその実施過程と深い関係があるとみてよいであろう。

しかもこの内容は「反乱政府を支持する主だった土地保有者達の權威に全住民は服従しなくてはならない」としており、こうした複数の土地保有者への服従命令は上奏文の路線と、内容的に一致している。

反乱政府はここに初めて、「反乱政府を支持する」土地保有者達と結合しえたのであった。

ロータクに存在した国庫からは既にイギリス時代の公金はデリーにもたらされており、その為か、次の収穫時まで

にまだ間があるという季節的な問題の爲か、ここでは新たな地租の即時徴集については記されていない。しかし、「必要な行政組織」の確立は行われるであろうし、その際のセトルメントの相手は当然、「主だった土地保有者達」であつたらう。

ところで、この行政措置が軍隊派遣を伴っていたことは注目しておかねばならない。無論、軍隊によってイギリス権力はロータクから追放されたのである。しかし、それだけでなく、「土地保有者達の權威」は明瞭に派遣軍隊が支えている。あるいは、「必要なだけの軍隊は直ちに派遣する」という文言自体で支えられているといつてもよいかもしれない。軍隊の派遣によって始めて、「主だった土地保有者達の權威」が「合法的權威」にかわり得たのである。そしてこの「合法的權威」に対して反逆行爲あるいは騷擾行爲にふける者」は軍隊の力によって、「嚴罰に処」せられるのであつた。

次に同じ様な勅令草案を二つ、検討する。

(45) 勅令草案、⁽⁴⁰⁾一八五七年八月二十一日

ソーネーパット、パーニーパット、ナジャフガルフ、バハードウルガルの主だった農夫達、^{ズアヤ}有力者達、^{サフ}土地保有者達、農民^{ベザント}へ、およびメワントの村民達へ

ここに、君らが地方へ進軍しつつあるミルザー・シャー・ルク・バハードウルの息子、我々の特別なる孫、ミルザ

ー・アブドゥッラー・バハードゥルと、司令官ムハンマド・バフト・ハーン・バハードゥルの軍隊の權威に対し、完全なる服従と尊敬とを命ずる。さらに上記王子と軍の將校から受ける命令どおり、軍に必需品全てを供給することを命ずる。さらに、地租でなく、忠誠の証としての献納金を送金すること、それを信頼できる人物に托し、王子の軍からの軍隊に護衛させて、決して他人に委せてはならぬ……

この勅令はおそらく、ソーネーバット、バーニーバット、バハードゥルガルなどデリー西北農村一帯に発せられたのであろう。内容的には殆んど、上奏文で述べられた形の軍隊派遣がそのまま行われている。即ち、司令官バフト・ハーン指揮下の軍隊に、「民事行政をとり行う」為の貴人——具体的にはミルザー・アブドゥッラー・バハードゥル——が附属している。

地租徴集やその為のセトルメントを行う旨明記していないのは、情勢の悪化やロータク同様季節的な問題からだとしても、一歩後退であることは否定できないが、それでも、農民との結びつきの中から財政難を乗り切ろうとしている姿勢は充分にうかがい知れよう。「地租、あるいは自発的献納金」を「派遣軍は寄托される」と先述上奏文に書いてあったとおり行われようとしているのであった。

(46) 勅令草案⁽⁴¹⁾、一八五七年八月二十一日

バグパットの副徴税官にして土地保有者たるグラーム・マウッディーン・ハーン——

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造(中)

軍隊派遣要請の上奏文に関しては、ミルザー・ムハンマド・シャー、即ちミルザー・ハッジの息子が君のもとに行く旨通告する。我が僕たる君は、心底から全力を尽し、必需品を供給せよ。また信頼すべき特使や軍隊の下にあって君の忠誠を願わす証として、軍隊には服従し、君の地租を提出し、君の個人的献納金をささげるべし。

反乱軍側の副徴税官が居た為、彼宛に勅令が発せられたという点を除けば、この勅令は内容的には史料⁽⁴⁷⁾と殆んど変わらない。地租といい、献納金といっても、さしあたりは実質的に変化がなかったということであろう。

このように、上奏文で計られた手段はとにかくにも、ある程度、実行に移されていたと考えられる。イギリス時代のセトルメントを改変するセトルメントがどの程度行われたかは、現在の段階では分らないが、民事行政の責任者が軍隊と共に派遣されたことは、少くともその意欲をもって各地に軍が向ったといえるであろう。従ってこの軍隊派遣が、反乱した村落の中小土地保有者達との結合を意志していたことも否定できないと思われる。

ではその結合は一体どのような問題を孕んでいたのか。その為には、もう一度、軍隊派遣がどのようにして行われたかを検討しなくてはならない。

軍隊派遣の最大の目的がイギリス軍との戦闘に備えるものであったことは言うまでもない。しかし、果してそれだけだったろうか。軍隊派遣の問題について以下少しく検討してみよう。

(47) ナジャフガルの警察官、マウルヴィー・ムハンマド・ズフル・フリーの上奏文。⁽⁴²⁾

一八五七年五月十八日

世界の庇護者たる皇帝陛下へ

皇帝陛下の御指令書に書かれた勅令は、ナジャフガルの町のタークル、チョウドリー、カーヌンゴ、パトワリーら全員に充分説明致しました。最善の処置が取られて居ります。

更に皇帝陛下の御命令に従って、騎兵、歩兵を集めるべく手段が講じられています。兵士達の給与はこの県のこの郡アイワイレンの地租から支払われると説明致して居ります。しかし、僕たる私のこの点に関する保証は、最近参加した義勇軍ガイジンが到着するまでは信じては貰えないであります。

ナグリ・カクロウラ、ダチャオー・カラン、その他近隣諸村では、住民は結果を恐れることがなくなった為、あらゆる過激なことに心を向け、旅行者達を掠奪しはじめて居ります。これら無法なる平和攪乱行為に関しては既に二通の上奏文を提出致しましたが、名声高く、有能なる王子殿下がどなたか、騎兵、歩兵、義勇兵ガイジンを充分なる数で率いて出馬され僕たる私の管轄地域を安定させられることを現在では望んで居ります。僕たる私はその際、無法なる村民を指示し、将来に亘り、秩序を維持し、犯罪を防ぐことを可能ならしめましょう……

これは土地政策に関する上奏文ではないが、この上奏文では、軍隊派遣が明瞭に要請されている。そもく既にとりあげた史料の中でも、軍隊派遣が要請されている例はいくつかあった。

例えば史料(9)における上奏文の中で、数十村を自分の部隊として持つ土地保有者達の懇願したものは「軍隊と御璽

のある勅令」であった。

また史料(4)のザミーンダール達も、皇帝の統治を嘆願したとあるが、それに対する回答に部隊の進軍が記されており、やはり、軍隊の派遣を要請したことが推測できる。

また史料(4)においてもこの勅令草案以前に軍隊派遣要請があったことが推測できるであろう。

このように軍隊の派遣は先の上奏文において突然現われてきた課題ではなく、農村がデリー政権へつながりを求めたとき、既に求められていたものであった。

無論、シパーヒーや皇帝、即ちデリー政府の側には、各々の別の意志が働いていたことはいうまでもない。シパーヒーの中にはムガル末期に至ってもまだ行われていた「軍隊派遣による徴税」のやり方をそのまま踏襲しようとする意識が皆無ではなかったろうし、皇帝は皇帝で、ともかく軍隊をデリー市から外に追いやることを追求していたから、軍隊派遣は容易に歓迎されたであろう。だが、それにしても、軍隊派遣がこのようなデリー政府側からの一方的な方針として打ち出されたのではなく、農村の側にそれを求める下地があったことにむしろ、今は注目しなくてはならないだろう。

その際史料(9)における上奏文で、土地保有者達が「軍隊と御璽のある勅令」を欲したことが重要である。彼らは、村を最少単位とする戦いを組みながら、しかも村の閉鎖性を越え、数十村にわたる広汎なカースト単位の戦いの組織化に既に成功していた。さらに、このようなカースト・コミュニティをこえ、インター・コミュニティな戦いが組織されつつあったのである。「軍隊と御璽のある勅令」とはこのインター・コミュニティな戦いを組織するためのいわば触媒であった。軍隊に求められていたのは第一に、コミュニティな性格から自由な、コミュニティとコミュニティとの間

をわたりぬける一種の脱共同体的集団としての存在であった。軍隊が到着し、村落は軍隊と結びつくとき、それまでのコミュニティな性格から解放される。それまでの「クシャトリア・カースト六十村」はそのとき、そのカースト性を切り捨て、中央軍と結びつく反乱共同体として、それなりの普遍性を獲得するのである。

既に述べたロータクにおいて「土地保有者達の権威」が軍隊の派遣とともに「合法的権威」と化するのもその意味であった。

けれども、軍隊派遣において、もう一つの側面をも見逃すことはできない。

史料(47)の上奏文の提出者は警察官ではある。だが彼が勅令を説明したタークル、チョウドリー、カーヌーングー、パトワリーらと彼とは一体的な階層をなしていると考えられる。即ち村役人、もしくは郡段階の役人を含む村落の有力土地保有者がこの上奏文の提出主体であった。

彼らが、軍隊派遣を要請するとき、訴えたものは何か。それは近づきつつあるイギリス軍ではなかった。彼らが訴えたのは、イギリス権力の崩壊とともに「あらゆる過激なことに心を向け」始めた、「無法なる村民であった。カーヌーグー、パトワリーらの役人によってこれまで支えられてきた村落秩序が下から、解体し始めていたことであった。戦いを組織する中で、村落はインター・ヴィレッジあるいはインター・コミュニティな戦いへと上方に向かって変貌すると同時に、村落秩序をうちこわすエネルギーがもっと下方から噴出しはじめていたのである。

反乱政府からの軍隊派遣の一つの役割はこの下からのエネルギーの噴出を抑えることにあった。史料(47)の上奏文は、中央(反乱)政府から援軍が来たらば、警察官を主体とした村落体制が「無法なる村民を指摘して」彼らを弾圧するのだという意図を露わに示している。史料(47)においても、グルガーオンのザミーンダール達は「この県の無秩序な状

態について注意を皇帝に喚起し、役人を派遣し、統治を行うよう嘆願」している。ロータクにおいても、「合法的權威に対して反逆行為あるいは騷擾行為に耽る者」が軍隊によって「嚴罰に処」せられるのは既に見たとおりである。

反乱の過程において、村落は、自からの力で村落体制の閉鎖性を断ちきり、デリー政府と結びついていったが、返す力で村落秩序を壊そうとするもう一つの力の伸長を切り落したのであった。しかも、村落外の力、デリー反乱政府の軍隊によって、である。ここに、自からの闘いの足を切り落したに等しい村落は、闘いのそれ以上の発展の芽を見失っていかざるを得なかったのである。

(1) Trial, p. 25.

(2) ここに前掲「一八五七年の反乱におけるデリー政權の構造(上)」p. 195. において述べた統治元年の印が押されている。この勅令の最後は、統治第二二年、ズィルカダ月二八日と結ばれている。後者は印ではないが、どうしてこのような矛盾した表記を同一勅令の中に使ったのだろうか。統治初年の印は製作されており、建前として統治元年の印を押したが、その表記法は熟していない為に、理解を期する為、もう一度従来通りの表記を記しておかざるを得なかったのではないか。

(3) Trial, p. 49.

(4) *ibid.*, p. 51.

(5) *ibid.*, p. 49. なお、五月二日付の上奏文では「……警察および地租徴集の諸役人も全地域で決定致しました……」とある。
ibid., pp. 52.

(6) *ibid.*, pp. 52~53.

(7) *ibid.*, pp. 53~54.

(8) *ibid.*, p. 54.

- (9) Trial, p. 59.
- (10) 明らかにミルザー・ムガルの命令である、と裁判記録には記されているが、その根拠は分らない、行政会議「シバーヒー」の系統から出された命令と考えられるから、ミルザー・ムガルのものである可能性は確かに大きい。
- (11) Trial, p. 61.
- (12) *ibid.*, pp. 61~62.
- (13) 皇帝の侍医、寵臣。イギリスに内通していたことは本文中からも明らかである。
- (14) Mubarak Shah; *op. cit.*, pp. 35-36. ムバーラク・シャー自身も反乱軍の要職にありながら、イギリスの味方であったから、このような内幕に通じていたのである。彼がイギリス軍に忠実たらんとしていたことは反乱後に判明する。
- (15) T. N. N., p. 91. 但し、この文章は領内で秩序維持の為に努力しているという意味であって、イギリス軍に内通して反乱鎮圧をしている意味ではないだろう。
- (16) Trial, p. 178.
- (17) T. N. N., p. 92. ジーワン・ラールの日記より。
- (18) Mubarak. Shah; *op. cit.*, pp. 34-35.
- (19) T. N. N., p. 91. ジーワン・ラールの日記より。
- (20) Mubarak Shah; *op. cit.*, pp. 72-73.
- (21) 前掲一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造上 pp. 187~196, pp. 212~216.
- (22) グルガーオンのズイラダールに任命されたのはファズレ・ハクの甥である、とハキーム・アフサスッラー自身の証言にあり、この任命のされ方は必ずしもバフト・ハーンの専権によつてはいない。この矛盾の理由はよく分らない。皇帝の弁護を意図した為に、皇帝が行ったことではないとして、バフト・ハーンの力がここで強調されたのかもしれない。第二章第二節史料の参照。

(23) バードゥル・シャー二世の裁判におけるハキーム・アフサヌッラー・ハーンの証言。Trial, p. 280.

(24) イギリスのスパイ、ファテ・ムハンマドの報告、日附は分らない。Secret Letters, Letter No. 191., Haq, Syed Moinal, *The Great Revolution of 1857*, Karachi, 1968, p. 150.

(25) Trial, p. 7.

(26) 一八三三年以後、少くとも北西州では、イギリス人の徴税官コレクターの下の副徴税官職をインド人に解放していた。逆に副徴税官は地租徴集機構の中でインド人が登りえた最高の職であった。Panigrahi, Devendra, *Charles Metcalfe in India*, op. cit., p. 117.

(27) この他に以下のような勅令もある。

一八五七年五月二十九日、特別御爾つき、

決意の象徴たるムハンマド・フリー・ベーク宛

…皇帝直轄（ハイム・シャー・アフ）の税務事務所および、当該県の税務署（タハシール）をジェイムス・スキナー邸とジェイムズ・スキナーの妻の最近購入した邸に設置せよ……

しかしながら、皇室直轄領と言い得るような土地は反乱前にも、反乱の最中にも事実上、存在しなかったと思われる。（後述註30をも参照）従ってこの勅令も、皇帝が帝室財政に計上しうる地租を自から掌握しようとして試みた効のない努力の一つであったと考えられる。

なお、皇帝が従来（イギリス時代）の役人をそのまま再任させようとした例には次の史料がある。これは、税務機構と関係の深い警察機構に関するものである。

「この頃、市警察署長（コーンスタブル）が病気になった。皇帝はムンドの警察署長（サイイド・ムバーラク・シャー）が町（デリー）に到着したの聞き、彼を市警察署長に任命した。警察署長（ムバーラク・シャー自身）はこれを断った。だが皇帝はこう答えた『君は

市警察署長の職に任命されても、実際の仕事は、イギリス政府から二百ルピーの年金を義母が貰っていたというカダル・バフシ
ユ・ハーンが君の副官となつて、これを皆行ふ。しかも、他の警察署長は自分の職に留まり、平常業務を行っている。だから、
君もこの任務を拒否するな』と」Mubarak Shah; op cit., p. 76.

皇帝は従来通りの機構をむしろ積極的に保持しようとしていたことが分る。一方、シバーヒーが必ずしも積極的な反対案を出
していないことも分る。

(28) 地租徴集機構自体もイギリス権力に見合つて作られたものであるが、地租徴集に従事してきた個々のインド人役人の姿勢も
イギリスに傾斜していた。次の史料参照、

「ファイズ・アフマドは税務局の書記官長だったが、(反乱時に、アグラ城の)門の近くにいた。(イギリス軍を攻める
ニーマチ軍に)こう呼びかけた。『ゆっくり行け、注意して。氣をつける。前の地面には坑道が掘られているぞ』。追跡してきた
反乱軍は止まった。もし、止まらなかつたら、人々の追撃は急で、(イギリス軍は)城門を閉めることは出来なかつたらう。損
害は大きかつたらうが、(反乱)軍は、城を占領しただらう。」Mubarak Shah; ibid., p. 109.

(29) イギリス時代の地租徴集に従事したインド人役人がデリーの人々によってどう見られていたか、を示す一史料がある。

「八十人から百人位のシバーヒーは副徴税官のラーム・サッラム・ダースの家に行った。本人は数週間前に死んだのだが、
非常に有能でイギリス政府に信頼された役人であつた。しかし、故人と町の人々との間には長い間敵対感情が存在していた。そ
こで彼らは故人の家族の女達に乱暴した。その内何人かは遂に回復しなかつた」Mubarak Shah; ibid., p. 23.

(30) Trial, pp. 220-221. また、帝室財政との関連で言えば以下の史料も参照。

勅令、一八五七年七月八日付、鉛筆書きの皇帝自筆の花押つき。

ミルザー・ムガルハ

……これまでいかなる帝室財政費をも我々は保持して来なかつた……

一八五七年の反乱におけるデリー政權の構造(中)

Trial, p. 64.

(31) Ball, Charles, *The History of the Indian Mutiny*, London, 1858—59, vol. II, pp. 630—631.

(32) これがバハードゥル・シャー二世自身によって自主的に書かれたものかどうかは、当然のことながら、確証はない。皇帝は後に裁判に立ったとき、「兵士達でも、ミルザー・ムガル、ミルザー・ハイル・スルターン、アブー・バクルらでも、上奏文を持って来る時は必ず、軍の将校が伴い、彼らの欲する命令を別紙に書いてきて、私の手で命令を上奏文上に転写するよう強請した」(Trial, p. 229)と述べているからである。しかし、この宣言文の発布がとくに皇帝の意志に反したとする史料もないから、他の勅令同様、別の人物——おそらく皇帝の側近——が書いたとしても、皇帝は黙許したのであろう。

(33) 前掲「デリー政権の構造(上)」における史料32と同じ。Trial, p. 64.

(34) Trial, p. 66.

(35) Trial, pp. 64—65.

(36) もし、これが行政会議の十人のメンバーの内の五人、とするなら、ヒンドゥーとムスリムの割合は四対一である。前掲「デリー政権の構造(上)」p. 232 参照。

(37) 軍隊派遣と同時に警察機構を確立しようとするのは、皇帝のやり方——単に従来の警察署長や市警察署長を再任していく——と明らかに違っている。註27 参照。

(38) Trial, p. 30.

(39) ロータクの反乱は以下の如くであった。「(五月中旬頃——引用者)ミール・ナワブと皇孫ミルザー・アブー・バクルの進言と計画に従い、二歩兵連隊と三門の砲、正規騎兵軍がロータクに派遣された。

……(反乱軍は)サムブラに止まり、そこからロータク金庫護衛兵と通信をした。ロータクからは、ロータク軍は反乱軍と共にあり、憂慮せずに行軍せよ、と言い寄こした。ロータクの治安判事のロック氏は、シパーヒーが命令に従わぬのを見、事実上

イギリス政府の金庫を掌握したのを知り、四、五人の忠実なインド人とバーニーパットへ向った。翌日反乱軍はロータクに入市、イギリス人居住地区の全家を掠奪、焼失させた。また、市内を掠奪し、……ミルザー・アブー・バクルは軍を率い、裏切り者のシバーヒー守備隊を伴い、政府の公金全額を携えて、デリーに帰った。……

：ロータクの治安判事は無事バーニーパットに着き、一旦休止、……（だが）第六十インド人連隊は、結局ロータクに戻るよう命ぜられた。しかし、ロータクに着くや、連隊は先にデリーに行つた部隊の一部始終を知り、自分達も公然たる反乱に立上つた。但し（英人）将校には手を下すことはせず、ただ「立去れ」と宣した。治安判事と将校はその結果去り、連隊もデリーへ向つた。Mubarak, Shah; op. cit., p. 40-42. また八月十四日から十八日の間に「反乱軍の騎兵の攻撃がロータクの方角に向けて行われ」とイギリス側は記している。反乱軍の攻撃はこのように何度かあつた。また、ロータク・デイヴィジョンの地租のとりきめを行つたのは有名なジョージ・キャンベルである。彼のとりきめは村を調査し、土地を測量し、土質と生産物の量を調査し、生産費を計算した上で行つた「完全な」^{セトルメント}とりきめとされているが、それによつても、これらの村々の地租額はざつと三倍になつた、という。Panigrahi, Devendra; op. cit., p. 61.

(40) Trial, p. 204.

(41) *ibid.*, p. 204.

(42) Trial, p. 7. ナジャフガルはデリーの西方約十五マイル。

結 び

本稿では、一八五七年の反乱における農村とデリー反乱政権との結びつきを検討してきた。

一八五七年の反乱におけるデリー政権の構造（中）

既に述べたように、一八五七年の反乱において、農村は非常に迅速な反応を示して注目されるが、それはもと／＼反乱前の農村が不安な、動揺状態にあった為であった。イギリスの地租制度の導入により、インドの農村は大きな変革を経験してゆく。イギリスのセトルメント、中でも高額地租によって、土地保有者達は没落を開始し、負債を膨大に抱えた彼らは、商人、金貸しの手により土地を譲り渡していった。しかし、このような激動に耐えられたのは、むしろ、村落共同体的社会関係の強い、いわゆる「後進地域」であった。法律上、あるいは書類上は土地の譲渡が行われたとしても、現実に土地購買者は「前土地所有者」が投獄されるまでは、不断の抵抗によって、購買した土地に足を踏み入れることさえ出来ないことが、屢々であった。そして反乱もまた、このように共同体的社会関係の強い地域、商人や金貸しが掌握していない地域からむしろ、頻発したのである。

けれども、彼らの闘いは共同体的性格の強さから想像されるような閉鎖的なものではなかった。闘いの中核は村落の中小土地保有者であったが、彼らが反乱の過程の中で、カースト的な、コミュニティ内のつながりによって、数十村の単位の村落を組織していったことは重要な事実である。さらに、この中で、インター・コミュニティ間の共闘、異なるカースト・コミュニティへの呼びかけの生れる根拠があり、異なるコミュニティの上に立つ煽動者が生れる基盤があった。繰り返して言えば、反乱こそ、村落共同体やカーストを日常的な閉鎖性から解放したのである。

農村における、このような闘いの伸びてゆくさきには権力問題がある。彼らはいわば必然的にデリー政府へつながりを求めていったのであった。

農村からの上奏文は皇帝の勅令を求め、また皇帝へ献上金をささげている。確かに農村の人々もまたシパーヒー同

様、皇帝を擁立しているかのようなのである。しかし、これを以てして、“封建的指導者”を擁立したから、“封建的”反乱だというのは早計に過ぎるであろう。重要なのはこの場合農村における闘いの実体であって、その為にどのような“象徴”を頭に載せたかということではない。デリー政府内でシパーヒーが皇帝権力を具体的に制限したように、農村における闘いの中でも、皇帝はいかなる“封建的”な役割をも果していないからである。

だが、反乱初期には、デリー政府とつながろうとする農村のこのような動きは、デリー政府の方針と矛盾していた。デリー政府の中心的階層をなすシパーヒーは既に一度農村を見捨ててデリーへ進軍してきた人々だった。皇帝やその側近は旧来の、イギリス地租徴集機構をそのまま利用し、農村からの徴税のみを計り、農村の反乱には関心がなかった。

デリー政府の四ヶ月は、同盟軍としての農村を発見してゆく過程であった。しかも、最初は少数の有力な参加者即ち、大ザーミーンダールへ主に呼びかけていたのに、次第にその範囲は下の階層にまで及び、反乱の主体をなしていた村落の中小ザミーンダールを、弱々しくはあったが、把えようとしていくのである。

この両者の結びつきは、正面からなされたのではなく、いわば逆手のつながりである。シパーヒーは財政難を解決しようとして、また皇帝は、デリー駐屯の軍隊をデリー市外に追い払おうとして行った面もある。この結びつきにはむしろ先程から述べているように農村の側が果たした役割が大きい。しかしながら、当時のインドで経済構造そのものにおいてイギリス批判のエネルギーを持ちえた唯一の存在であるインドの村落共同体は、一方で村落共同体から最も切断された兵士という階層を媒介にし、皇帝という存在を得て、インダー・コミューナルな闘いから権力問題の提起へと一挙に飛躍したのである。

このように、一八五七年の反乱では反伝統的な、いわゆる「近代」的な思想や行動が、純化された形で直截にその姿を現わしては来ない。

しかし、むしろ伝統的な階層が、反乱の中の曲折に満ちた道程の中で、その伝統を切り崩していく過程に、インドにおける反帝国主義運動の拠点としての、別の意味での「近代」がその姿を表現しはじめていると考えてよいのであるまいか。そして遂に村落共同体を基盤にもつ中小土地保有者がイギリス権力と対峙関係に立つ。この構図に筆者はインド民族運動の第一歩を見る。

さて、こうした意味を持つ軍隊派遣が、村落体制を破ろうとするもう一つの胎動の破壊に向かったことは本稿の最後で述べた。

つまり、デリー政府が村落共同体を同盟軍として認識し、軍隊を派遣して、結合が完成した瞬間に、農村での闘いは崩壊を孕みはじめたのであった。

(附記、山崎利男、鈴木斌氏には原稿の段階で目を通していただき、いくつかの助言をいただいた。記して感謝を表したい。)